

“きび”考

2011 年(平成 23 年) 第 4 号 7 月発行

日本先史古代研究会

“きび”考 2011(平成 23)年 第 4 号 目次

○古代吉備に新たな視点(新刊書によせて)	若狭哲六 ……………2
○若狭会長の出版記念祝賀会の報告	山崎泰二……………3
○王藤内隆盛と曾我物語	大守 隆……………5
○連載 考古フアンのじゃれごと ③ 「湊茶臼山古墳の埋葬者を想定する」	山崎泰二……………8
○縄文土器文化に秘められた謎	矢吹壽年……………12
○土の地名と神社めぐり	井上秀男 ……………14
○新連載 四国八十八ヶ所 巡り 「歩き(ウオーク)遍路の旅」 ②	樋口俊介 ……………18
○『吉備国の語源・黄蕨について-3』 『吉備(黄蕨)国・高嶋宮伝承の解析』	丸谷憲二……………23
○編集後記	山崎泰二……………32

日本先史古代研究会「設立宣言」

日本列島には、遠く西アジアや中国から、もたらされた
「知られざる古代遺跡」が数多く存在している。考古学・
歴史学・民俗学的分野を超えての「先史的見知」により、
分析・調査・研究を駆使して、日本の歴史を正すことを目
的に、賛同者有志一同で「日本先史古代研究会」を設立する。

2009(平成 21)年 5 月 30 日(設立総会にて)

“古代遺跡に新たな視点”(新刊書によせて)

日本先史古代研究会 会員 若狭哲六(当会会長)

私は、28 年というながきにわたり、熊山遺跡を軸とし遺跡と関連する多くの古代遺跡とめぐりあうことができました。

私達の住む岡山県(古代吉備)には、実に多くの遺跡の存在を知ることができました。なかでも、吉井川東岸に遺存されている鶴山丸山古墳は、全国でも類を見ることの無い古墳であることに気づいたのである。

鶴山丸山古墳は今から 75 年前、熊山遺跡は今から 73 年前にそれぞれ地元の人々の手により発掘されているのです。

私は、1991 年 12 月の著書(私家説)で、この両遺跡についての発掘の真相についてのべてきたのです。その後、20 年というあいだ**熊山回春**への夢は断つことができず、**試行錯誤**の末、**稿**を新たにして自説を発表させていただいたのです。

それは **東アジアから見た日本**

知られざる古代吉備

日本古代史の源流を探る です。

本書は、前稿には不十分な面があるため、新たな古代史観を加え、両遺跡の「構築の意義」を明らかにしたのです。これまで、日本の学者・研究者の間では、全く取り上げてはなかったことなのです。

今おもえば、日本古代史の謎は、ここ**古代吉備**に存在していたのではないかとの思いを強くしたのです。

今後は**倭国の誕生と倭国の大乱・女王国の元首卑弥呼**についての研究に入りたいと思っています。加えて**中国五県・四国四県**の古墳より出土されている「**銅鏡**」について研究も手掛けてみたいと思っています。

(文責 若狭)

若狭会長が熊山遺跡の研究に取り組んだ経緯

昭和 59 年(1984) 熊山遺跡に出会う

昭和 60 年(1985) 地元の古老から熊山遺跡より取り出された遺物を知らされた。

昭和 61 年(1986) 遺物に付いての考証は独自に行う。

昭和 62 年(1987) 来日中の中国社会科学院教授の李学勤氏と接見し、遺物の写真集を提供した。

その後、李学勤教授より写真についての所見文を贈られる。

昭和 62 年(1987) 論著【古代国家形成のなぞー熊山とシルクロード】を発表

昭和 63 年(1988) 論著【先史日本の夜明けー熊山と東西交流史】を発表

昭和 62 年(1987) 論著【先史日本の夜明けー発見されたシュメール文明】を発表

平成 元年(1989) 論著【先史日本の夜明けー熊山で見つかった「石」と「鋸」】を発表

平成 2 年(1990) 論著【先史日本の夜明けー世界史的に見た吉備・女王終焉の地】を発表

平成 3 年(1991) 論著【先史日本の夜明けー女王国邪馬台国の謎に迫る

国指定・熊山遺跡・鶴山丸山古墳発掘の真相】を発表

上記の著書「先史日本の夜明けー女王国邪馬台国の謎に迫る」は

米国議会図書館・ミシガン大学・トロント大学・ハーバード大学図書館

日本国会緒間・岡山県立図書館にも収蔵されている。

1993 年には中国歴史考古誌「文物天地」に掲載され広く中国に紹介されました。

平成 23 年(2011) 論著【知られざる古代吉備】を出版

若狭会長の出版記念祝賀会の報告

著書名＝知られざる古代吉備

開催日＝平成 23 年 5 月 22 日(日)

場 所＝岡山コンベンションセンター2 階

企画・主催＝岡山県華僑華人総会 劉 勝徳会長

発起人代表＝大守 隆(内閣府政策参与)

衆議員逢沢一郎先生を始め各界の主な方々約 50 名が山陽放送の橋本昌子アナウンサーの司会によってオープニング、まず発起人を代表して大守隆氏がユーモアのある祝辞をされ、その後若狭会長と旧知の中国清華大学の李学勤教授の祝辞を中国人留学生によって披露されました。

日本語訳文

会場の様子はインターネットにより世界中に同時配信されました。

「若狭先生が著書《知られざる古代吉備》の本は、日本の先史時代に対して、重要な貢献があり、若狭先生は中日文化交流に対しても、非常に関心を持っています。私は若狭先生の中国の古い友人として、

非常にうれしく思っています。ここで敬意と祝賀を表します。おめでとうございます。」

李 岳勤

盛大裡の内に宴も進み、参加者には著書が謹呈され、日本先史古代研究会の仲間も多数参加していただきました。先生おめでとう！！参加者の皆様ありがとうございました。

会場の光景(雰囲気をご想像ください)



大守発起人代表の挨拶



若狭会長の挨拶



歓談の会場光景



会長と大守氏



お祝辞 柳瀬岡山商大教授



閉会の挨拶(山崎)



井上・本松氏



ロビーにて(樋口・山崎・井上・若狭・大守)

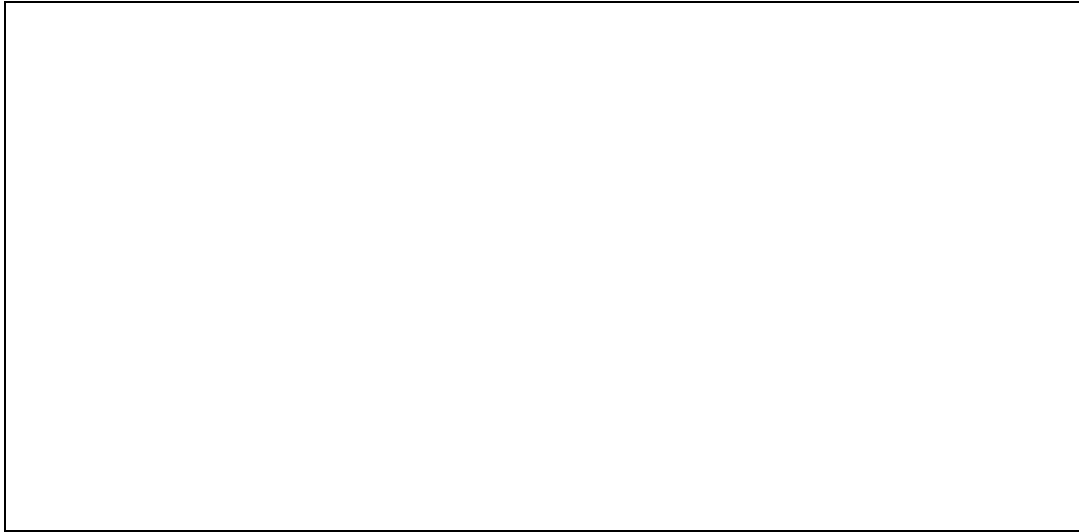
若狭会長の新刊書の案内

本の名称＝「知られざる古代吉備」 A5版 293 ページ
サブタイトル: 東アジアから見た日本 日本古代史の源流を探る

申し込みは直接下記をお願いします。(書店での販売は行っていません)

〒705-0022 岡山県備前市東片上 771 若狭哲六 宛
電話・FAX 0869-64-0184
E-mail mayuuzanwakasa@yahoo.co.jp
HP : <http://www.gensee.jp/wakasa/>

日本先史古代研究会事務局でも取次ぎをいたします。
料金は書籍代 2600・と送料 350・合計 2950・を書籍発送時に同封します
振替用紙にて振込み下さい。



王藤内隆盛と曾我物語

日本先史古代研究会会員 大守 隆（大守王藤内家第七十九代当主）

1. 事件の概要

建久4年5月28日（1193年6月28日）の雨の日の深夜、王藤内隆盛は曾我十郎祐成（すけなり）・五郎時致（ときむね）兄弟の仇討ちに巻き込まれ、富士の裾野で死去した。隆盛は大守王藤内家では中興の祖とされている先祖である。

日本三大仇討ち話の一つ（他の二つは「忠臣蔵」と「伊賀越えの敵討ち」）といわれるこの事件を振り返ってみよう。舞台は、富士山の雪解け水が豊富に流れている段丘の付近で、現在の静岡県富士宮市上井出、森と草原が混在している地域である。前年に正式に成立した鎌倉幕府の頼朝政権が、ここで大規模な「巻狩り」を行ったのである。巻き狩りとは野生動物を森から追い立てて射ることで、当時の武器は弓矢であったので、軍事演習を兼ねた一大イベントであった。演習終盤の28日の深夜、事件は発生した。

頼朝政権の高官であった工藤祐経（くどうすけつね）の宿所を王藤内隆盛が泊りがけで尋ねていた。王藤内は、平家に肩入れしたとの嫌疑から、領土が没収され、数年間鎌倉で囚人となっていたが、工藤祐経のとりなしで領土を安堵されたことから、そのお礼に来訪したのである。

その日の夕刻、若者が中を覗いているところを警備の者が見つけた。その若者は招き入れられて、工藤祐経と王藤内隆盛が二人の白拍子（遊女）とともに開いていた酒宴に参加した。若者は曾我兄弟の兄の十郎で、工藤祐経の親戚であったが、昔、身内同士の領土争いから、彼の父の河津三郎祐泰（相撲の決まり手の河津掛けの名の由来となったとされる人物）は工藤の手の人に殺されていた。父が非業の死を遂げた後、母が兄弟を連れて曾我太郎祐信という男と再婚したので、兄弟は曾我姓を名乗り、それまで何度も工藤に対する仇討ちの機会をうかがってきた。

工藤祐経は十郎に、父の敵というのは事実無根であり、今後は力になろうと告げた。十郎は内心を隠して盃を受けた。しかし帰りがけに隠れて聞いていると、工藤は十郎の父を昔殺害したことを王藤内に話していた。

戻った十郎は弟と仇討ちの相談をした。そして夜更けに雨の中、兄弟で宿所に押し入った。しかし、宿所には工藤も王藤内もいなかった。そこで近くの頼朝警護の侍所を探すと、そこに工藤と王藤内がそれぞれ白拍子とともに寝ていた。兄弟は、兄が工藤の足側に、弟が頭側に立ち、兄が肩を切りつけてから、名乗りを上げた。工藤は気がついて太刀を取ろうとしたが、兄弟に切り殺された。王藤内も騒ぎに気づいたが兄弟に切られ絶命した。

兄弟が親の敵を討ちとったと大声を上げたので、武士たちが駆けつけてきた。十人の武士が兄弟に殺

傷された後、周りが松明などで明るくされた中、新田四郎忠常が出てきた。この巻狩でも頼朝に向かってきた手負いの大猪にまたがってねじ伏せた豪傑である。十郎は他の武士の介入もあって討ちとられた。（十郎は畠山重忠の情の下で自刃したとの説もある）。弟の五郎はある武士を追って、頼朝の屋形の大幕を上げて中に入った。中では、騒ぎを聞いて女装して様子をうかがっていた力自慢の五郎丸が油断した五郎に抱きついて取り押さえた。頼朝も騒ぎで目を覚まし太刀を手にとったが側近に制止された。

あくる日、五郎は引き出され、頼朝の直々の尋問を受ける。頼朝は五郎の命を助けようと一度は思ったが、工藤祐経の子息の懇願もあって死罪となった。

備前の王藤内家には、6月13日に領土安堵の吉報が届き、一同が喜んでいたが、23日に、部下が骨をもって帰り、一転して悲しみに暮れた。一方、十郎の妻となった遊女、大磯の虎は出家し、大阪の四天王寺で、ある尼と親しくなる。それが王藤内の妻であった。彼女は王藤内の最期の場所を見せて欲しいと大磯の虎に頼み、一緒に駿河に行った。

2. 現在の状況

この事件は曾我物語や吾妻鏡などで採り上げられたために、記録はかなり残っている。しかし、資料によって異なる記述もあり、事実が脚色されている可能性もある。また、現地にも多くの跡地が残っている。以下の各所は④の王藤内の墓を除いて、いずれも富士山西麓の観光名所「白糸の滝」（日本観光百選滝の部第1位、軽井沢近辺の同名の滝とは別）から徒歩圏にある。

①音止めの滝（写真1）：曾我兄弟が仇討ちの相談をする際に、この滝の音が大きくうるさいので、静まるように神に祈ったところ音が止まったと伝えられている。白糸の滝に向かう道から左手に真近に見ることができる。この滝の別名は男滝で、女滝とも呼ばれる白糸の滝とは対照的な豪壮な滝（高さ25メートル）である。

②曾我の隠れ岩（写真2）：音止めの滝の上流を左折し、川にかけられた歩道橋を渡り、駐車場を横切って歩くとすぐ右側にある。この岩に曾我兄弟が身を潜めたといわれる。人の身長よりやや高い岩であるが、草の陰にちょうど人が隠れる位の隙間があり、脇の階段を上るとそれが見える。

写真1 音止の滝

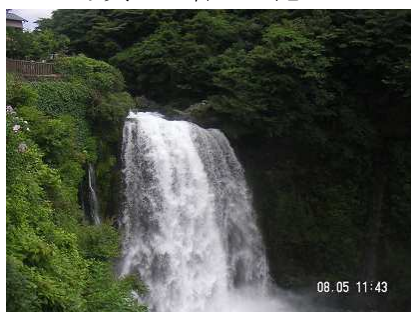


写真2 曾我の隠れ岩



③工藤祐経の墓（写真3）：さらに東に少し行くと、工藤祐経の墓がある。この辺りに宿所があったと言われており、王藤内が殺害されたのもこの近くであると考えられる。小さな赤い祠の奥に土盛がある。東側は高台になっており、明治以降の軍人の墓や再建された忠魂碑が立っている。この丘からは富士山の雄大な姿が望まれる。なお祐経の墓は故郷の伊豆にもあるとの由である。

④王藤内の墓（写真4）：富士見駅の南南西約1.5キロ、星川放水路沿いの道に、自證寺の前からの小道が合流する付近の住宅地の一角、曾根家の小さな墓地の中にある。「歩く博物館、王藤内の墓」という富士宮市の茶色い標識が敷地内に立っている。

写真3 工藤祐経の墓



写真5 王藤内の墓



脇の碑には以下のように書いてある（句読点は筆者が補った）。

「王藤内の碑 建久四年五月二十八日曾我兄弟に討たれた工藤祐経の客人王藤内の墓が、月乃輪黒田寄りの畑に大きい白椿が二本ありその根本にあった。星山放水路用地内のため移転することになり、之が移転先について郷土史研究で有名な植松先生の助言、大宮町史等の資料に基き、王藤内と関係のあった曾根家先祖の墓所に合祀することになった。曾根家の先祖は源頼朝の馬廻役で、その馬場が月之輪（現在星山橋東側の山裾）にあったと伝えられ、現在の墓所もその一角と考えられる。終戦直後迄は多くの石碑灯籠等があったのを記憶しているが、現在ではその多くを失っている。何れにせよ王藤内も同じ頼朝縁りの者、曾根家の先祖と地下でその居を一にして当時を語り合っておることと思ふ。この史実を将来に伝えることも曾根家の後継者として意義あると考え、この碑を建立し供養する。

3. 二つの疑問

私が疑問に感じた2点を記しておきたい。読者の皆様のお考えもお聞かせいただきたい。

①工藤祐経は何故討たれたのか？---彼は仇討ちの危険を十分に意識したと思われる。仇を恐れて、兄弟を頼朝に処刑させようとしたこともあった。また、五郎が僧侶の修行をしていた箱根山を訪れた際には自分は親族だから後ろ盾になれるとして五郎に赤木の柄の短刀を与え、懐柔を試みている。さらに、八幡七郎に兄弟を討たせようともしている。当日の夕方に十郎が宿所に現れたことから危険は察知できたはずである。では何故討たれてしまったのか？ これに関しては3つの可能性があるように思われる。第1は、頼朝政権も完成し、乱世が終わったのだから、曾我兄弟も新体制の中で役割をみつけて生きていくであろうと考えた可能性である。高官である自分を殺害すれば、兄弟の母が恐れていたように彼らの将来もなくなる。死を覚悟してあだ討ちをするという行動が彼の想像を超えていたのかもしれない。第2は、備前という遠方に帰る客人の王藤内との酒宴を優先したという可能性である。王藤内の往訪の趣旨からすると、二人の白拍子は王藤内が連れていった可能性もあろう。こうしたもてなしを楽しむうちに酔いもあって警戒心が薄れたことも考えられる。なお、祐経は王藤内の助言によって屋形を変えており、それで一安心と考えていた可能性もあろう。

第3の可能性は、事件が黒幕が書いたシナリオに沿って起きたというものである。死者の多さからみても、また頼朝の宿所にも影響が及んだことからみても頼朝に対するクーデターであって、曾我兄弟はいわば利用されたという可能性である。仇討ち事件とされたのはクーデターが失敗したからであるとの見方である。こうした見方をする歴史家が少なくないが、誰が黒幕であったかに関しては様々な仮説があるようである。

②なぜ第三者の王藤内も殺したのか？---義を重んじる仇討ちにおいて、何故無関係の第三者を巻き込んだのであろうか？兄弟で相談している際に、弟の五郎は王藤内を巻き込むことに関し憐れみの情を述べた。これに対し十郎も逃げるならば許そうと答えていた。また十郎は従者に、本懐を遂げたら急いで自害するとも話していた。王藤内が兄弟の前に立ちはだかつて仇討ちを阻止しようとしたのならともかく、二人で祐経を二太刀ずつ切りつけた後に王藤内を殺したり、駆けつけた他の武士と戦ったりしたのは何故であらうか。仮にそれが事実だとしても、物語にそのように書くであらうか？ 王藤内が妨害したので殺傷したとの話にするのが普通ではないと思われる。ただし、上記の第3の説をとれば王藤内は、クーデターの混乱の中で命を落としたということになる。

<参考資料>

「物語の舞台を歩く 曾我物語」坂井 孝一著、山川出版社、2005 年

「曾我物語の史実と虚構」坂井 孝一著、吉川弘文館、2000 年

「曾我物語(新編日本古典文学全集)」梶原正昭・野中哲照・大津雄一(翻訳)、小学館、2002 年
「富士の巻狩と曾我兄弟の仇討ち」富士宮市郷土資料館ホームページ
「浮世絵に見る曾我物語」小田原市「おだわら百科事典」ホームページ

“考古フアンのじゃれごと”③

日本先史古代研究会 会員 山崎泰二

湊茶臼山古墳の埋葬者を想定する

所在地＝岡山市中区湊 (操山丘陵南部の山頂)
古墳の形＝前方後円墳 墳長＝約 120m以上 後円三段・前方二段築成
築成年代＝5 世紀初頭 現説＝平成 22 年 12 月 23 日
最大の特徴＝中心埋葬が存在しない未完成古墳
発掘者＝岡山市教育委員会

1. 湊茶臼山古墳のこと

平成 22 年の年末に地方紙の山陽新聞では 1 面記事でその他の全国紙にも大きく掲載され考古ファンをうならせる大きなニュースとなった。かねて岡山市の教育委員会が学術調査をしていた湊茶臼山古墳の第 3 次発掘成果が発表された。我々の仲間も説明担当者の安川満先生の解説を傾聴した訳である。この古墳の築造期が 4 世紀末と想定されていたものが 5 世紀初頭に変更になったのは詳細な調査の結果であり、その頃この界限では 100m 前後の古墳として、金蔵山 (165m) 神宮寺山 (150m) 網浜茶臼山 (92m) がいずれも初期の前方後円墳として存在する。少し間を置いて 5 世紀前半には日本第 4 位 (築造時日本最大規模) の造山古墳 (360m) (周濠あり＝22 年度岡大により発掘) が吉備の中枢部に築造される。3 世紀中国の文献魏志倭人伝に登場した邪馬台国はその後しばらく文献から姿を消している時期が西暦 400 年前後でこの湊茶臼山古墳の築造に該当する。

安川担当官の説明の概要は下記の通りである。

- ① 古墳の主体となる埋葬の痕跡がない。
- ② 未完成の全国規格の前方後円墳である。埴輪が部分的に出土して古墳としては未完成のままである。
- ③ 寿陵 (古墳の主が生前から作る) の可能性が高い。

新聞の報道記事によると、専門家の学者のコメントが添えられている。

- ① 茨城大名名誉教授の茂木雅博先生＝「不慮の死」のため主体埋葬がない。
- ② 岡山理大の亀田修一教授＝「不慮の死としながら、吉備勢力内外で起きた異変を反映」

- ③ 岡山大学の松木武彦教授＝「古墳造りのルールが変わり予定通り築けなかった」として暗にその直後により大規模な造山古墳築造に着手しなければならない政治的意図を想定する。
- ④ 岡山県古代吉備文化財センターの宇垣匡雅総括副参事＝「例えば朝鮮半島で繰り返された倭と高句麗との戦いで死亡した遺体を持ち帰れないで、埋葬できなかった可能性もある」
- ⑤ 作陽大学の沢田秀実准教授＝「生前に墳丘を築き、埋葬時に葺石や埴輪を整備するなどの古墳の築造過程が見えてきた」

など諸説が紹介されている。岡山市教育委員会の見解では

「この古墳は何らかな事情で古墳の主が埋葬されなかった可能性がある」とした上で、問題点として

- ① 古墳時代の研究では、埋葬祭祀は「王権」の継承儀礼でもあったと考えています。ではこの古墳に埋葬出来ない理由は何であったのでしょうか。
 - ② 古墳の築造・整備と埋葬祭祀の関係です。古墳は生前どこまで準備しておき、埋葬に伴いあるいは埋葬後に何を整備するのか。
- との見解を示した。

当然のことながら考古フアンとしては学者の公式見解だけでは物足りなさを感じる。そこで紀元 400 年前後の年代で、先人の示した資料や諸説を参考に私の見解を纏めてみたい。

2. 当時の列島（朝鮮半島と日本列島）界隈の状況

弥生末期から古墳時代の初めの日本列島では、その前段に中国南東部の江南人が新天地を求めて、朝鮮半島経由など色々な方面から水耕稲作（乾田方式＝現代の農法と同じ）技術を持ち込み、九州島北部から数百年の内に日本列島を優秀な稲作文化圏にしています。水耕稲作により連作障害を克服し乾田方式で水の管理がやりやすい日本列島は、稲作発祥の地である中国の江南地区に比べても格段の収穫量が増えます。当時すでに食糧の 60%はお米であったことが、土器による炊飯を研究している北陸大学の小林正史先生は平成 23 年 1 月 16 日の講演で述べておられます。「稲の育て方」の新技术は「土器による炊飯」により豊かな食生活をもたらし、中国北部や朝鮮半島に比べ日本列島では急激に人口が増加し東北地方まで席捲してしまうのです。生産者の食糧は充分に確保され、余剰米は風水害の不慮の災害用の貯えになり、海人による近隣諸地方との交易使われ、活発な交流の源になったのです。

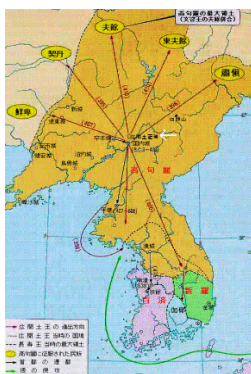
弥生人（日本列島特有の人種で我々現代人も同じ系統といわれています）の農耕民にとって最も必要であったことは、自然現象の的確な把握でした。具体的には稲作の植え付けや収穫にかかわる天地異変の予知は彼らの生死を左右します。大陸を移動する遊牧民である騎馬民族は、夜の星を見て移動し、昼の太陽の昇り降りて季節を知り、雲の動き一つで天候の異変を予知できたのです。西から移動してきた騎馬民族は大陸の東端に来て、朝鮮半島の農耕民と合体します。我々の先入観では騎馬民族はその機動力で元から居た住民を侵攻・略奪をし、相手を殲滅すると信じていました。中国人はそれを恐れてあの長大な「万里の長城」を築き自国を守ったと教わりましたが、江上波夫先生（騎馬民族征服王朝説論者）は佐原眞先生（古代史学者）との対談の中で「騎馬民族は多彩なバリエーションの持ち主」とした上で異民族と合流したとき、自分たちの得意な文化＝天文知識などを駆使して相手を敬服させ、その後は相手に合わせて「合体」する「啼くまで待つ・・・家康タイプ」だと語っています。先住民を良い方向に先導する支配者として定着するのです。人種としては圧倒的に農耕民の弥生人が多く渡来＝外来系の彼らは人種的にも倭人＝弥生人に同化してしまいます。初期ヤマト政権の担い手として、その後の大和政権に大きな関わりを持つことになります。

今の北朝鮮や旧満州周辺で力を蓄えた騎馬民族は夫余族と同化し高句麗朝（前 37-668）が中国の三国志時代の国々と対峙しながら朝鮮半島の覇者を目指して南下してまいります。説によると日本列島に移住する以前に多くの倭人が朝鮮半島に住んでいましたが、勢力拡大の過程で九州島北部から列島の先住

民になっていた農耕民族の弥生人と同化して来るのもこの時期なのでしょう。その頃の朝鮮の南部は三韓時代と称していました。後の百済＝馬韓・新羅＝秦（辰）韓・任那＝（倭国）は弁韓であります。任那弁韓はその後ヤマト政権の一部として歴史に残ります。余談ですが、今の朝鮮民族は主に韓国と北朝鮮それに旧満州の中国の3カ国に分離しています。大陸に接続している宿命なのかもしれません。古代の朝鮮も大国＝中国や蒙古族に常に侵食・圧迫され時には倭人の支援を受けていました。余談ですが日本が百済を支援する形で唐と新羅の連合軍と戦った白村江の戦いに破れ、百済は滅亡し朝鮮は新羅が支配し、倭国の朝鮮における拠点を失うのは西暦663年のことであります。天智天皇がまだ皇太子の時代です。

3. 好太王碑が史実を示す

私の手元に昭和59年（1984）7月28日付の朝日新聞の一面トップ記事と3面の解説記事の切り抜きなどが数枚あります。当時は中国の北朝鮮近くに存在する「好太王碑」に日本人が近寄ることが大変困難な時代に現物を見た記事が大きく報じられたのです。この好太王碑は今から約1600年前の西暦414年に古代朝鮮の高句麗王がその2年前に亡くなった、父である好太王（高句麗王朝19代）（374-412）の功績を讃えるために建立したもので、実物を見た関東学院大学の山田宗睦教授（昭和60年当時）は「高さ6.4mで側面は1.5m幅の3面と2m幅の1面計4面に1775文字（当然漢字）が刻まれていて、当時1600年の風雪で痛み、その上プラスチックの補強がされ拓本を取るために塗られた石灰の残りのため判読は大変困難と報じています。碑は共和国吉林省通化地級市集安市にあります。



好太王碑

しかしこの碑文は史実直後の文章で、かの有名な中国の魏志倭人伝の2000文字に匹敵する文献として高く評価されているものです。この好太王碑については、大きく二つの側面を持っています。

- ① 碑文の内容（当時の日本のことを記録している）
- ② 旧日本軍（先の十五年日中戦争＝第2次世界大戦）による「改ざん説」として扱われた不幸な出来事。（今回はこの件は省略する）

碑文の内容は三部構成で、その第2部に好太王の業績を賛美した部分に、倭（日本）が登場します。順を追って説明します。

- ① 倭が辛卯年（391）海を渡って百済を討って臣下とした。
- ② この為、高句麗は百済と親交があったので、倭を攻めた。
- ③ 399年百済は（高句麗との）誓いを破り倭と通じた。そこで王（好太王）は平壤に出向いた。
- ④ その時新羅から使者が来て「倭人が新羅に侵入し、王（新羅王）を臣下としている」と救援を求めた。
- ⑤ 400年好太王は5万人の大軍を派遣して新羅を救った。
- ⑥ 新羅の王都にいた大勢の倭軍が退却するのを追って任那・加羅（両国とも倭の一部＝朝鮮半島南部）に迫った。
- ⑦ 倭は404年にも帯方（黄海道）に進軍。王はこれを討って大敗させた。とあります。わずか13年間の出来事です。驚くばかりの事件です。当時の倭の力のすごさが推測されます。別の説による

と、当時百済と新羅は倭国と同族であり、お互い身内同士であった説も有力です。

高橋護先生（元ノートルダム女子大の教授）は平成3年3月23日の講演で、この好太王碑文を取り上げて造山古墳の築造者が生存していた時期に重なり、魏志倭人伝以来しばらく途絶えていた中国の歴史書の宋書夷蛮伝に「倭の5王＝讃・珍・済・興・武」が正史に登場します。倭の5王の最初の「讃」より一代前の倭の大王の時代が、高句麗の好太王と戦った人物ではないかと推定なさっています。

日本の歴史の中で西暦400年前後のことは、はっきりしていません。学者によっては先述の好太王碑から、すでに当時倭国にヤマト政権が存在し朝鮮半島に出兵したとの論も存在します。私は倭人が百済や新羅に出兵したのは事実としても「ヤマト政権が海外に出兵した」とは思いません。理由もなく搾取のために出兵するほどの政権が当時の日本列島には確立していないと思うのです。4世紀前後倭人は北九州・朝鮮南部（任那＝加羅・弁韓・倭国）そして出雲・吉備、ヤマトに展開し同属の関係にありました。特に吉備の海人は稲作の豊富な富を背景に、これらの仲間と共存して活躍していました。朝鮮南部は自分たちの古里であり同族であるばかりではなく、朝鮮半島から産する原料の鉄の入手できる重要な仲間が存在していたのです。その仲間を護るため当然のこととして新羅を守り百済を守ったのです。

一方夫余の満州族を含む朝鮮族である高句麗から見ると、後進の倭人が水耕稲作の技術で大きな成果を上げ大勢力になることは認め難くないのは、ある意味で当然のことでしょう。当時のヤマトは大国中国と国交を断ち、独自の建国に向けて力を蓄えていた時期でした。倭の王権が徐々に確立している頃です。

その頃吉備の操山の丘陵では100mから150mの前方後円墳が次々と築かれていたのです。すぐ眼下に吉備の穴海が展開し、豊富な魚介類も獲れ、背後の西の大川（今の旭川）による水の恩恵を受けた田圃が広がり稲穂が富を約束してくれています。遠目でも白い葺石の湊茶臼山古墳などが林立する様は、今日の岡山の高層ビルを上空から眺める比ではなかったと思われます。これらの古墳のすぐ後には造山古墳が巨大な姿を現します。大本組の試算では延べ150万人もの人材が投入された日本列島最大のモニュメントが造成されます。逆算すると湊茶臼山古墳クラスだと4～5万人が動員されそれが次々と少なくとも4基は築造されるのです。吉備の富の懐の深さが伺い知れるところです。畿内勢力を圧する大きな力が吉備に存在していたのでしょう。日本列島を取り巻く倭人集団の中で突出してその果たすべき役割も大きく、朝鮮半島南部の同族を助けに行ったとしても不思議ではありません。吉備は鉄の加工（鋳造・鍛造）技術の専門家集団です。原料の鉄を求めて真っ先に吉備の海人が中心になって、余剰のお米を中心に物資の支援が出来たのは、湊茶臼山古墳などを造った吉備の首長たちしか行うことは出来なかったと思います。

学者は当然のことながら慎重でなければなりません。先に紹介した諸先生の申しておられる中で、宇垣匡雅先生の評論は我々にとって最も示唆にと富む教示であります。私は平成22年12月23日に行われた岡山市教育委員会の湊茶臼山古墳第3次発掘現場説明会を聴き、すでに25年も前の好太王碑の新聞記事や高橋護先生の講話を総合して、古墳時代の初期にヤマト政権が産声を上げ、「吉備の祭祀」が基になり箸墓古墳の墓制として形作られたヤマト政権の一翼を、吉備の入り口で一番見栄えのする場所に築いた湊茶臼山古墳に埋葬されなった首長のアクシデントが好太王碑に残された史実と重ねて見る事で、「考古フアンのじゃれごと」と致します。



5 世紀の朝鮮半島



湊茶臼山古墳の山陽新聞記事 2010. 22. 12. 15

縄文土器文化に秘められた謎

日本先史古代研究会 会員 矢吹壽年

旧石器時代から新石器時代、縄文時代へかけて色々な人たちが渡来し、かつて日本は多民族国であったと考えられた。彼らはかつて住んでいた所の文化や習慣をそのまま持参し、話し、以前と同じ生活をしていただろう。ここで、変だと思った人はすばらしい。何で言葉が通じるの、という訳だ。中国の南東部、朝鮮半島、日本、満州の地区は現在でも同言語族で一括される。古朝鮮語で万葉集が解るのは当然で、何も朝鮮語が日本語のルーツとばかりとは限らないのである。日本語が朝鮮語のルーツかも分らないからである。これを発表した人は、日本より朝鮮の方が大陸続きで文化が日本より高かったという希望的前提があるのだと思う。

そして縄文土器は、新石器時代とは一線を画する、食生活に大改革を与えてくれた時代と指摘したい。粘土を練って形を整え、乾かして、焼いて器を作る文化は従来の獣肉の焙り焼きや、熱灰に乗せて熱を通す貝や栗、里芋、椎の実の食べ方と比べて煮る、蒸す、炊くことによって、美味しく消化の良い食べ物として寿命が延び、衛生的にも人々を健康的にし、人口が急増したことが推測できる。

岡山市北区津島三丁目、岡山理科大学の進上路付近にあった「朝寝鼻貝塚」(あさねがはな)は約50年も前から知られた遺跡だったが、学問的な調査は行われず、宅地化して幻の貝塚と呼ばれていた。平成9年、加計学園・岡山理科大学の専用道路計画地点にこの遺跡の存在を予想し、学術調査を実施、現在の地表面から1mほど下に貝塚を再発見、貝層の上下に重なる地層から4000年前、縄文時代後期初頭～前葉に遡る土器や石器・骨角器・獣骨等を確認した。貝は汽水に棲息する大和シジミがほとんどだった。貝層から一才位のニホンザルを納めた深鉢型壺が出土し、愛玩用動物の飼育と葬祭の存在を確認し、さらに3m～3.5m下の地層から旭川下流域では最も古い6000年前の土器群(羽島下層式)を確認した。国内に野生種が無い米、小麦の粃殻(もみがら)のプラントオパール(珪酸体ガラス質細胞)が確認されて、小麦と縄文米の栽培が6000年以前に遡り、それまでの通説をひっくり返した。

現在の日本米に近いジャポニカ種(次の弥生時代に渡来)以前に長粒型のアジア南方系米を栽培していた事実を証明した。この種の栽培は陸稲(おかぼ)だったと言う説があり、陸稲に適した畑地は鹿田町辺りに広く存在する。鹿田町辺りは条里の地割りが存在するものの、江戸時代池田忠雄(ただかつ)の入封の頃、玉柏からの用水開鑿(かいさく)まで良田ではなかった所である。

縄文土器を用いて、柔らかくて美味しい食事が子供の死亡率を下げ、老人には長寿を、若人には健康と元気を与え、出生率の増加を高めた。獣肉の筋は土器で煮る事で消化が助けられ、コラーゲンとして薬膳を兼ねる事となった。幼児時期の高栄養摂取は彼等の知能の伸張にも寄与したことが考えられる。反面、

長寿、出生率向上による人口の増加は極端な食物不足をもたらした。近所周辺だけでは猪や鹿も捕れなくなった。石器時代は獲物を採取して移動した時代だったが、縄文時代は簡単な栽培を行って定住が始まった時代でもあった。何時も期待通り収穫が出来るような懐の深い山などは、神の存在を予感させた。栗や栃も収穫の多い美味しい種類を選んで山に植えていた事も判った。畑、栗山を経営しながら鹿や猪を狩りに行くのである。

狩猟は怪我の多い仕事である。そのうえ短くて2・3日、長くなると10日に及ぶ旅に出る。経験の長い年長の男が首領になり、若い男たちを引き連れての旅である。無事に帰って来るように、豊猟と安全と留守宅の無事を祈る信仰の始まりである。男は女の貞淑を、女は男が浮気せぬようにと祈った。現在の神社仏閣での祈りにも似ている。旅ごとに一定の場所で行われるようになり、これが神社の起源ともなる。吉備の中山は左右に三角のおにぎり形の山の中央に鏡餅を据えたような三角形に見え、この中山からも縄文土器が発見されている。奈良の橿原(かしはら)神宮の境内は縄文時代の祭りの遺跡であり、背後の畝傍山(うねびやま)は風水の福地で奈良盆地を南に下ると美しい山形をみせる。ここからは男根形の石器を発掘、宝物殿に収蔵されている。朝寝鼻の貝塚遺跡の背後の半田山も美しい三山形に見える。これも風水福地といえることができる。縄文時代以降風水福地に遺跡が集まるように思える。自分たちの里に帰ってくる時の目印となる山の形を意識し記憶するようになった。目当て山の認識である。

風水という言葉は中国で6000年以前に興った神仙道という総合科学の一部門で、地理に適った運の良い土地を選ぶ方法で、皇帝や王族、貴族の宅地の選定や、都市計画、埋葬所の選定に用いられた。東洋哲学に基づく方法で日本へは遣隋使派遣以降に伝達された、中国文化の一つである。それと同じ風水に則った遺跡として縄文遺跡が存在するのである。道教が成立するのは二世紀の五斗米道の成立と言われている。では卑弥呼が用いた鬼道は誰が教授したのか。秦の時代、徐福の渡来(前 219)を示唆する者があるが、定説に成っていないし時代違いである。東洋文化の真髄を指摘できるのは風水成立以前の海中の小国日本であった。韓国にも指摘できる。

縄文遺跡に数多く出土する性を思わせる石棒や女体を表現する偶像は、土器により調理することで、美味で身体を元気ににし、賢い子孫を産んでくれる女性、縄文の土器類、これを製作する作り手も女性でこの文化を褒め称えている。しかし火炎形土器にいたるころには男性の技術や思いを感じる。勿論土器の焼成には男性が専ら関わっただろう。中国文化の伝来、ここに朝鮮経由以外のルートを認識する必要があるとしたい。

ところが、儒教にせよ道教にせよ、過去に完成したものでないことを認識しておく必要がある。中国の道教聖地五岳の内、北の恒山(こうざん)には、三徳山(鳥取三朝の投入堂)の原型と思われ、崖面の上部に老子と孔子と釈迦を三聖殿として一緒に祀っている。成立以前の各々はそれぞれ東洋哲学から集大成し、共通点を多く持ち、他を凌駕するほどの特異性を独占しない。常識的な教養集積のための研究、修業は各々否定しないで三教を兼修する事も可能であった。各々が成立してしまうと唯一正当なのは自分たちであると他を牽制しあって謗(そし)りあうのである。

現在の中国には社会主義を選択したことにより、正当な道教は継続できなくて、存在はするが、過去の模倣の域を出ない。神話の意味さえも理解できていない。現在、活動しているのは台湾道教で、これらの説を見てみると、現在も進歩が見える。では仏教はどうかというと、完成した仏教として導入されるが、言語の相違のため漢文に翻訳される必要があつて、この時に原インド哲学やインド主義的因習は中国的思想、慣習に改められ、加えられているとの意見がある。

「韓国の名宝」に載る櫛目文(くしめもん)土器(注①)は紀元前三世紀ソウル郊外岸寺洞(あむさどん)出土。これは日本の縄文土器の先駆的なものと同様式といえるが、韓国でどのような発展的効果をもたらしたかはいまだ聞いていない。古代日本に伝わって火炎形土器にまで発展した縄文土器の文化は、古代朝鮮に於いては、以後の発展的遺物が紹介されていないのは、どのような事情があったのだろうか。紀元前一万五千年前、西アジア地中海沿岸に興った石臼、石杵を持つケバラー文化が現れ穀物利用を暗示する。パンの文化である。紀元前六千年前頃中国長江流域に土器を伴う初期稲作農耕文化が認められる。同じ頃日本にも縄文土器の発生、発展がC14年代(炭素14の崩壊率から年代を推定すること)で紹介されている。朝鮮半島に櫛目文土器が現れるのは、前五千年と言われる。朝鮮に櫛目文土器が定着してから日本に文化移動したとは言い張れない。加えて日本に縄文文化がもたらした効果は朝鮮では確認されていない。

これは古中国により人民を奴婢として一方的に略奪と収奪された結果と指摘したい。日本でも縄文文化に恵まれた人々を弥生代たちは駆逐し、捕らえた。卑弥呼が魏へ貢いだ生口は同時代の弥生人ではなく縄文人であった可能性が高い。弱肉強食は強者の論理である。朝鮮は漢の武帝の時代にも四郡を置かれ収奪されている。朱蒙(ちゅもん)の高句麗建国伝説も、中国によるしつこい収奪要求から人民を守る正義の王として描かれている。

ところで、後の朝鮮に繋がる箕子(きし)朝鮮も衛満(えいまん)朝鮮も現在の北朝鮮から中国東北部の地域で、遼東半島から中国の大遼河以西までに及んでいる。朝鮮の呼称が最初に出てくるのは中国の「管子」で前七世紀ごろの文献とされるが、中国の燕を攻撃し南の斉とは盛んに交易を行っていたという。北朝鮮の学会では古朝鮮を実在した部族国家とみなし、檀君神話(注②)は古朝鮮の存在を神話の形を借りて語りつたえたものだとして解釈する。古朝鮮は紀元前8～9世紀にはすでに強力な奴隷国家として登場していた。

というのなら、新石器文化では青銅器の武器に敵わないわけで、土器の使用は何時からだろうか。前一世紀頃中国東北地方の影響をうけ、無紋土器を製作、平行して流入して来た青銅器を使うようになったというが、これには一説があつて前六世紀ともする。土器は紀元前後頃瓦質土器に発達する。最近著しい発掘数の上昇に伴い前五～六世紀におよぶものも紹介されている。箕子朝鮮は前1122年中国殷の賢人箕子(きじゃ)が古朝鮮に渡り檀君の王位を継承した。このとき檀君の年齢は1908歳、一説には1038歳と「三国遺事」(1280年編)に記録されている。しかし遺物等で証明されたものは無い。箕子朝鮮は青銅文化、衛満朝鮮は鉄器文化といえるようだ。

前195年燕の將軍衛満は朝鮮王準に降り遼西の守りを任される。中国の燕の精鋭鉄武器を装備していた衛満の軍は一年後箕子の王位を篡奪、準は海を渡り、南韓に王となったという。衛氏朝鮮は前108年漢の武帝の攻撃を受けて滅ぶ。その故地に楽浪・真番・臨屯の三郡を設置する。翌年玄菟郡を設置して税の貢納を督促する。税が納められない者は法に基づき奴婢として漢へ送られる。土地を捨てて逃げる者は難民として収容され奴婢とされた。この後、真番・臨屯を廃止させ、玄菟郡を西へ後退させ、前37年朱蒙が高句麗を建国する。

古代、日本の縄文・弥生・古墳の時代は、東洋に於いては奴隷制度を認めた時代であった。卑弥呼も行っていた殉葬の被葬者はこれら奴婢達であった。中国の皇帝、朝鮮の伽耶王墓にも殉葬が見られるが日本の古墳は如何に。

注① 櫛目文土器＝朝鮮の考古学的区分で紀元前8000年から1500年頃に及ぶ櫛の歯状の模様をもつ土器で日本の縄文土器の初期様式と相似。

注② 檀君神話＝古い朝鮮の神話で紀元前2333年に北部朝鮮に檀君が建国し彼は1908歳まで生きたと日本の記紀に相当する三国遺事(1280年編)に載っている。現代に続く朝鮮と区別して「古朝鮮」と称した。檀君は古朝鮮の祖との神話が残っている。

筆者追記 今回原稿を書いている思い出しましたが、「卑弥呼の墓には殉葬が為されていると東夷伝に書かれており、真実であれば、殉葬の無い墳丘墓は卑弥呼とは関係のない。」ことになります。今回の小論に対する皆様の質問や意見など、お考えを教えてください。

郷土の地名と神社めぐり

日本先史古代研究会 会員 井上秀男

一、苗字 氏 名字 姓の語源について

私は苗字(みょうじ)姓氏、地名の起こり由来について調べたりする事に興味を持っている。苗字の語源は稲の苗が分かれて増殖するように子孫も分家から更に分家が繁栄するような意味を含んで名づけられたとも言われている。名字(みょうじ)は天平 15 年(743)開拓地の私有が認められたところから、平安時代より開拓者や土地支配者が土地の領有を宣言する意味も含め、地名を家名としたことに由来するとされ、反対に家名を地名とする場合もあり地名と家名のどちらが先なのかといった点も考えられるが、その土地の在名をもって名字姓氏とする場合が多いように思う。

氏(うじ)は血縁もしくは職業を同じくする人達によって構成された部族(集団)の公称で、その村や地域の首長(氏の上＝うじのかみ)を神格化したのが氏神で俗に村の氏神様と呼ばれている。姓は「しょう・かばね・せい」と色々に呼ばれていますが、カブネ(頭根)カブナ(株名)また、骨を意味する(カバネ)等の語源から後に家格を表わす姓(せい)と呼ばれるように変化していったのだろう。苗字とその発祥地、地名との関連性等を調査研究しているといろいろなことが知ることができて歴史が楽しくなってきます。

苗字や姓氏を調査する場合の文献資料として姓氏研究や系図等の分野では、古代の氏族能持続を調べるには新撰姓氏録があり古代から弘仁年間(810～823)までの諸氏 1182 氏を分類し地域ごとに整理した文献、尊卑文脈(5 巻)室町初期の系図集大成で帝王から諸家の系譜まで氏族発生研究資料として必要な文献です。他には姓氏家系大辞典(全三巻)太田亮著 昭和 49 年発刊 角川書店出版 この本は図書館等でも見られます。寛政重修諸家譜(22 巻)その他色々な諸本が出版されています。

地名の文献では古い時代では「和名抄」(わみょうしょう)は源順が承平年間(931～8)に編纂された日本で最古の辞書である。大日本地名辞典(吉田東伍著)全八巻明治 33 年 2 月初版、その他全国地名辞典等が出版されています。各県下の郡誌等大字・小字史もあります。

二、ふるさとの地名と史跡

岡山市から県道美作線を湯郷方面に車で走って 30 分で赤磐市山陽町下市地区そこから赤坂地区を通って仁堀地区から登り坂を上った所に菊ヶ峠ドライブインその頂上部から下り道になる。車で走って 15 分ぐらいすると平地が広がった地区になる。左側の山頂に城が見える、この地区が周匝(すさい)で湯郷方面から吉野川津山方面から吉井川と合流した所である。この合流地点の近くに飯岡(ゆうか)地区があつて、有名な月の輪古墳がある。山の頂上に見える城は戦国期に和気郡の天神山城主浦上宗景の家臣の佐々部氏居城の茶臼山城で天正 7 年(1579)2 月宇喜多直家に攻められ落城する(備前軍記参照の事)この周匝(すさい)の地名が書かれた木簡が平城宮跡から出土している。「備前赤坂郡周匝郷調鋏十口 天平十七年(745)十月廿日」と記されている。この土地で当時採鉄して製品としていた技術が有った訳である。

この周匝橋のある手前-Kmの信号交差点を左折して西方面に行くと黒本地区に入る。すると是里(これさと)方面の標示があり、登り坂の道路を頂上まで上がると最初にある集落が物理(もとりい)という地名で私の生まれた故郷である。この物理部落より西の久米郡方面に部落が点在している。舟木・馬場・宗成河西・河見・梶谷・延定・本村といった地名がありこれらの集落を総称した地名を是里(これさと)と称している。標高 300mぐらいで見晴らしの良い地形があり弥生時代からの稲作が行われていた。石包丁や石斧も土器等も数多く出土している。弥生時代中期から後期に掛けての遺物が多いようである。是里の本村の塚風呂遺跡から出土した壺と器台がある。(写真参照)



私は是里の地名について渡来人の呉服部(くれはとり)織物に関係した部民が居住していたと推測しています。呉(くれ)が是(これ)に訛ったのだろうか、呉の里(くれの里)が是里(これさと)と呼ばれるようになったと思っている。

久米郡久米南町の周辺には秦氏に関係した地名や神社等がある。地名では倭文(しとり)地区にある倭文神社、錦織(にしこり)の地名にある秦氏の氏神である錦織神社がある。錦織は秦氏が伝えた絹織物である。この絹織物には桑が必要である。

倭文地区にも桑村(くわむら)という地名があり、雄略朝期(5世紀後半)諸国に桑の木を植え絹織物が盛んに織られていたとされている。物理(もとりい)の字名に桑間(くわま)と呼ばれている地名があり、昔養蚕を行って織物を作っていたと考えられる。私も幼い頃、畑に桑の木を植えて養蚕をやっていたのを記憶している。

三、倭文神社の所在地

倭文神社の祭神は倭文織(しどりおり)の神で天羽槌雄神(あめのはつちお)建葉槌命(はきはづち)を祀っている。倭文という地名の語源は日本古来の織物の倭文織にあると言われ、読み方は「シトリ・シズリ・シドリ・シトオリ・シドリノ・シダ」とあり文字は倭文を志鳥・志津・委文・静と書くところ。倭文地区の近くの錦織地区には渡来人の秦豊永(はたほうえい)という人が居住していたと記している(倭文地区の歴史による)。

倭文神社で式内社としてある場所は鳥取県倉吉市志津、鳥取県東伯郡東郷町宮内の御冠山(おかむりやま)に在り倭文大明神と称し延喜式(河村郡の官社で中世よりの一ノ宮である。伯耆の二ノ宮は鳥取県倉吉市福庭(ふくば)に鎮座している波波伎(ははぎ)神社で主祭神は大日貴神となっている。鳥取市大字倭文字家の上、山陰の鳥取県に三座も鎮座している。また鳥取県米子市宗像に式内社の宗形神社がある。祭神は宗像の三女神である。

四、是里の宗形神社と周辺の古社

宗形神社は延喜式内社である。延喜式は醍醐天皇の命により延喜5年(905)に編纂に着手して延長5年(927)に全50巻として完成したとされ、式内社は延喜式の神名帳に挙げられている神社のことで国家からの奉幣(ほうへい)を受けることの規定された神社であるとしている。宗形神社は赤磐市是里字大宮山に鎮座している。昔は大宮山は、巻ノ宗(まきのむね)と呼ばれ祭神は宗像三女神で市杵島姫神・田心姫神・多紀津姫神であり三女神は天照大神と須佐之男命との誓約(うけい)によって生まれた神々である。神階は従四位上で御祭には七十五膳・七十五樽の献上の儀式がされている。私の子供の頃には盛大に行われていた。宗形神社棟札で古いもので和氣郡天神山の城主の浦上遠江守宗景が永禄5年(1562)8月16日に大願主として社殿を再建立している。江戸時代の貞享4年(1687)備前藩主の池田忠雄が米十石を寄進して修復している。宗形神社の後方には掘り鉢型をした穴が点在している。昔に採鉄をした場所ではないかとも伝えられている。穴の大きさは直径数十メートル深さ5mぐらい有ると思う。子供の頃その穴の底部に下りて遊んだことがあり、キラキラと光る鉱物のような石があった記憶がある。宗形神社の近くに地名で梶谷(かじや)宗成(むねなる)物理(もとりい)水取部・母止理部と水と関係した部民と、地名があり採鉄につながりのある遺跡とも思われている。久米郡と是里地域の境界線ともなる神ノ峰(こうのみね)y山がある。標高517m宗形神社から北の方角である。ここに古社が三座ある。是里字神ノ峰に神峰神社があり祭神は大汝貴命、次に字神ノ峰に神峰伊勢神社、祭神は天照大神と豊受姫命、つぎに是里字剣山(つるぎやま)に剣抜神社(つるぎぬき)が有って南朝の年号の興国4年(1343)の備前国神明帳には備前国式内外古社128社の一社に挙げられている。祭神は素盞鳴命である。この小さな是里の地に式内社宗形神社と合わせて四社も古社が鎮座している場所は珍しいと思っています。県下の式内社の宗形神社は(旧御津郡一宮町)現在の岡山市大窪に鎮座していて、祭神は宗像の三女神です。



宗形神社 鳥居

五、布都魂神社について

布都魂神社は石上字風呂ノ谷に鎮座している。日本書紀および延喜式神名帳に見える古社で祭神は素盞鳴命で出雲神話の中で有名な素盞鳴命の「ヤマタノオロチ」退治に関する伝承で素盞鳴命が大蛇を斬った「蛇韓鋤之剣」(おろちのからすきのつるぎ)が吉備神部(きびのかむとものを)のもとにあるとの伝承がある。石上神宮と記す場合は大和朝廷の武器庫の管理をしていた現在の天理市布留に鎮座する石上神宮を言う。石上部(いそのかみべ)は大和国山辺郡石上郷より起こる。古事記に磯上と有りこの地に石上神宮が鎮座し物部氏の氏神布留の御霊剣を御霊代とする。備前国邑久郡に石上郷がある。赤磐市の布都魂神社の神主は物部氏と称しているが以前は野村氏を称していたのですが延宝 7 年(1679)に備前藩主の池田綱政の命により物部氏を称している。

六、物理(もとりい)の地名について

岡山の地名で物理と呼ばれている地名は 2 箇所、旧吉井町(是里地区)と旧瀬戸町の坂根地区に昔物理保とよばれていた、中世には物理城というのが有って物理貞茂という人物が居たと言われる。旧吉井町は是里字物理とよんでいる。「続日本記」には物理郷神護景雲年中(767~769)に母止理部氏(もとりべし)等の記録があつて、母止理部とは大化以前の水取部(もひとりべ)という品部(もとべ)で中央へ出仕する伴(とも)の費用を負担する農民集団としている。姓氏録によると水取連「神饒速命六世孫伊香我色雄命之後裔」とあり物部系である。

8 世紀になると中央では和気清麻呂の姉の広虫等が称徳天皇(女帝)から信任を受けて活躍している。和気氏と秦氏は京都葛野郡(かどの)加茂県主(かもあがためし)の関係があつて加茂県主は葛野郡の氷室(ひむろ)に奉仕し水取連(もひとりのむらじ)を掌握していたと見られる。和気清麻呂(平野邦雄著)略年譜254頁の条に神護景雲3年(769)6月の条に「藤野郡人母止理部奈波 赤坂人少初位家部(やかべ)大水 美作国勝田郡人従八位上家部 国持等六人石野連ヲ賜ル」と見える。その当時部(べ)から連(むらじ)への姓(かばね)の変更は氏族にとっては社会的にも地位の上昇を意味するものであらうと思う。

母止理部や家部(やかべ)の部民は職業的な分野の中で和気氏一族との関係を保ちながらの交流が成り立っていたのだと私なりに感じられる。石野連の姓を賜った部民の中には、採鉄をしたり養蚕をして織物や土木関係の仕事に従事した人々の営みが有ってその地域の文化や伝統を伝えてくれた先祖の恩恵を受けて現在の自分がある。お盆や彼岸には必ず先祖の墓に参る私も故郷を離れて四十数年の月日が流れてしまった。故郷に帰ったおり土地の風景を眺めながら幼い頃走って遊んだ場所や田畑には、今は雑木が繁り昔の姿は見えなくなっている。しかし今回は「ふるさとの地名や由来について」また神社等に関して私なりに諸文献を参考に纏めてみた。地名の中からふるさとの姿が見えてきた。

参考文献 赤磐市郡誌(全) 瀬戸町誌 久米郡誌 倭文の歴史
地名辞典 姓氏大辞典

四国八十八ヵ所めぐり「歩き遍路の旅」2

日本先史古代研究会 会員 樋口俊介

発心の道場(阿波の国) その2

「1 番(霊山寺)～23 番(薬王寺)」合計23ヶ寺(徳島県)

発心(ほっしん)とは、四国霊場巡拝を志すこと。

はるか彼方に向かって1200Km あまりの辺路(へち)

の旅へ、皆様をご案内いたします。

当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容を分かる範囲で説明をします。

これからが修行のスタートです。必ず最後まで歩き通します。

第2回目＝平成20年5月12日(月) 春の田園地帯を歩く！

歩き(ウォーキング) 遍路 札所4ヵ所(6番～9番札所) 約 13Km

遍路で唱える、お経は、密教のお勤めが基本。一般に本堂と大師堂では、遍路用の経本にしたがって下記の順番で唱え、もし暗記していても、経本を見ながら唱えるそうです。

- ①合掌礼拝・・・・・・・・・・(合掌礼拝といい、胸の前で合掌、三礼しながら「うやうやしくみ仏をたてまつる」と唱える。
- ②開経偈、懺悔文、三帰、三竟、十善戒　(開経偈、懺悔文、三帰、三竟、十善戒を各一回　唱える)
- ③発菩提心真言・・・・・・・・・「おうぼんじったばだはやみ」　を　三回唱える
- ④三摩耶戒真言・・・・・・・・・「おんさんまやさとばん」　を　三回唱える
- ⑤般若心経・・・・・・・・・・般若心経を一回唱える
- ⑥御本尊真言・・・・・・・・・・各札所のご本尊のご本尊真言を三返し唱える。これは本堂のみで行なう。大師堂では省略
- ⑦光明真言・・・・・・・・・・光明真言を三回唱える。これは、真言宗の一番大事な仏である大日如来の真言。
- ⑧御宝号・・・・・・・・・・弘法大師の名前である御宝号「南無大師遍照金剛」を三回唱える)
- ⑨回向文・・・・・・・・・・回向文を一回唱える。これは仏道を成就することを願うもの。
- ⑩合掌一礼・・・・・・・・・・「ありがとうございます」と述べて合掌一礼する。)

6 番札所＝(温泉山)安楽寺　所在地＝徳島県板野郡上板野町引野寺の西北 8

電話＝088-694-2046

宗派＝高野山真言宗
開基＝弘法大師
本尊＝薬師如来

○開基当時は、現在の位置からおよそ1.5Km 西の安楽寺谷であったといわれている。兵火で焼失したのだが、万治年間（1573～1592）に現在の位置に移り再興した。谷から湧き出る鉄錆色の熱湯が万病に効くと評判だったため、遠くから湯治におとずれる人も多かったという。

薬師如来について　人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の誓願をあらわす如来で、四国霊場にはいちばん多く祀られている。

筆者紀行

5番から歩いて約5Kmを1時間30分（途中10分位休憩する）で到着した。前回の歩き遍路では一日中雨が降り続きましたが、今日は見事な快晴でバス2台（80人）で、林原駐車場6時40分出発し前回歩き終わった5番（地蔵寺）に9時30分に着き、歩く準備をすませ先達さんを先頭に7番札所へ途中で4、5歳の子供達3人から手を振ってもらい或いはお年寄りのご夫婦から頑張ってと声を掛けられるなど四国の人々から暖かい温情を感じながら気持ちよく元気で歩きました。周囲の方々に感謝！無事にお参り済ませ7番へ

7番札所＝(光明山) 十楽寺　所在地＝徳島県阿波市土成町高尾法教田 58

電話＝088-695-2150

宗派＝高野山真言宗
開基＝弘法大師
本尊＝阿弥陀如来

○ 大師の開祖で「人の出会う生老病死の四苦や八苦を逃れ、十の快樂が得られ宗るように」という願いを込めてこの寺名がつけられた。眼病や失明に霊験があるという地蔵尊ある。参拝を終えたあとに視力が蘇ったとの例があるそうです。

阿弥陀如来について　寿命無量、光明無限の仏。絶えることのない生命力と輝きをもつ。「南無阿弥陀仏」の念仏を唱える者をすべて極楽へ導く。

筆者紀行

6番から歩いて1.2Kmを15分くらいで到着する。7番札所「十楽寺」の本堂に安置されている本尊の阿弥陀如来は、創建時より伝わるものだそうだが、残念ながら秘仏のために見ることが出来なかった。

遍路道には、ところどころにお遍路さんが休めるような“お接待所”があります。お菓子や飲み物

が頂ける所も随所にあり、なお お接待を受けたら、納札をお渡しするのがお約束です。お接待は、基本的には受けること。それは「お遍路に行けない私の分までお参り下さい」という代参の意味でもあったりするからです。

とにかく大勢（80人）ですから信号、車、曲がり道等では、スタッフ、各人は常に気を配り一緒の行動が大変でした。しかし歩くという行為は、人間に具わっている根っこの力を呼び覚ましてくれるようです。 無事にお参り済ませ気持ち新たに！8番へ

8番札所＝(普明山) 熊谷寺 所在地＝徳島県阿波市土成町土成前田 185

電話＝088-695-2065

宗派＝高野山真言宗
開基＝弘法大師
本尊＝千手観音菩薩

- 田畑が広がる小高い山の中腹に豪壮な仁王門が立つ。その迫力に圧倒され、思わず立ち止まり見上げてしまう。熊野権現があらわれ、観音像を大師に授け去った。そこで大師は一堂を建立。みずから等身大の千手観音を刻み、その頭髮の中へ120粒の仏舎利、胎内に授かった金像を納め、本尊としてまつたとされる。太師堂の大師像は第12番焼山寺に次いで古く、永享3年（1431）年に彫られたものという。

千手観音菩薩について 千手千眼観自在菩薩というのが正式な名前で、それぞれの手に眼をもつ。さまざまな持ち物を手にして世界の衆生を救済する。

筆者紀行

7番から歩いて4Kmを1時間5分（途中5分休憩）で着く。歩いていると、道沿いにきれいな花がたくさん植えられていて和む。都会よりも花の色が鮮やかな気がした。ずんずん山道を歩いていくと、山の斜面に、二層の山門が見えて来た。熊谷寺の山門は和様と唐様（禅宗様）の折衷様式。高さ13.2m。この山門は四国八十八ヶ所霊場の中で、最大の大きさで、県の重要文化財にも指定されている。なんて素晴らしいのだろう。また、本堂へ向かう途中に、ひときわ色鮮やかに目を引く多宝塔の横の参道を登って行くところの中門には、派手な色彩の毘沙門天様と持国天様がいらして、それにも思わず見とれてしまう。

しかし後に続く人が多くてゆっくりと見とれている事が出来なく残念！！せっかく登った山だったが、お参りを済ませすぐに下り。急ぎ足で次の9番札所をめざすが、少し足が痛く左側の足裏の2ヶ所に豆が出来たようですが、その事は自分の中に収め皆と一緒に頑張って歩く。ただ歩く。ある時は、ひたすら無心に。またあるときは、四季の自然を五官で感じながら。歩くということは本当に、いろんな事を教えてくれます。

9番札所＝(正覚山) 法輪寺 所在地＝徳島県阿波土成田中 198-2

電話＝088-695-2080

宗派＝高野山真言宗
開基＝弘法大師
本尊＝涅槃釈迦如来

- 昔、松葉杖をついて参拝に来た人が、参道で足が軽くなって病氣完治したという逸話がある。そのため、山門には大きな草鞋が奉納されている。現在では健脚祈願として、本堂にたくさんの草鞋が奉納されている。釈迦の入滅を表す涅槃像を本尊とするのは、四国八十八ヶ所でもこの法輪寺だけである。

涅槃釈迦如来について 仏教の開祖釈迦牟尼が入滅する姿を表す。涅槃（入滅）とは、あらゆる煩惱や苦しみが消滅した境地をいう。

筆者紀行

8番から歩いて2.7Kmを45分で着き、大勢のためいろいろとありスムーズに行かないが何とかお参りを済ませる。ここ法輪寺は四国八十八ヶ所霊場で唯一、涅槃像が本尊の寺。また、本堂には

お遍路さんが無事に歩ききれるよう、健脚祈願のわらじが多数奉納されていたので、私もお祈りをしました。

次の10番札所までは約一時間以上も坂道を歩かなければとの思いを取り除き、お祈りもしたことだし、気を引き締めて前に進むのみ。そして周囲の環境、自然の中での空気の美味しさを感じながら、気持ちを新たに目的地へ着くためには目の前の一步の歩みを進める事だけが、唯一の方法です。そして辿りつく一日のゴール。お遍路の旅はそんな小さな達成感の積み重ねでした。当日の札所4ヶ所（13Km）の歩き遍路は16時05分に終わりバスに乗り岡山へ林原駐車場に19時20分頃に到着し、あと我が家へ！！

第3回目＝平成20年6月9日(月) 潜水橋を渡り吉野川対岸へ

歩き（ウォーキング）遍路 札所2ヶ所（10番～11番札所） 約14Km

10番札所＝(得度山) 切幡寺 所在地＝徳島県阿波市切幡観音 129

電話＝0883-36-3010

本尊＝千手観音菩薩
開基＝弘法大師
本尊＝千手観音菩薩

○ 大塔は国の重要文化財に指定されている。元和4年、徳川秀忠が大阪の住吉神宮寺に寄進したものを、明治維新の廃仏棄釈の際、廃寺により西塔を天祐上人がここに移築した。移築には明治6年から15年の9年の歳月かかる。

千手観音菩薩について 千手千眼観自在菩薩というのが正式な名前で、それぞれの手に眼をもつ。さまざまな持ち物を手にして世界の衆生を救済する。前記に説明の通りです。

筆者紀行

9番から歩いて5Kmを1時間30分（途中で休憩10分）で着く。岡山林原駐車場を6時40分に出発して、前回歩き終わった9番（法輪寺）に9時20分に着き各自で準備を済ませて、9時30分から歩き出し10番（切幡寺）に11時ごろに着きお参りを済ませ次へ、途中の八幡で昼食をする。その間の約30分くらい激しい雨が降る。しかし歩き始める頃は雨は止む。元気をだして歩き出すも坂道あり階段が多くあります。333段の石段を上る山の中腹の寺、境内には立ち姿の美しい観音像がある。秘仏の本尊は、機織りの娘が即身成仏し変身したという千手観音である。女人成仏の寺として善女の信仰を集めている。階段は上るときよりは下りの方が疲れるみたいです。11番札所へ行く途中には、お遍路さんが通ると「絶対に感動する！」といわれ、川の水量が増えると橋が潜る「潜水橋」を通るといっているので、楽しみだ！

11番札所＝(金剛山) 藤井寺 所在地＝徳島県吉野川鴨島町飯尾 1525

電話＝0883-24-2384

宗派＝臨済宗妙心寺派
開基＝弘法大師
本尊＝薬師如来

○ 境内に入ると、寺号の由来となった立派な藤棚がある。これは弘法大師が護摩壇を築いて修行を積み、境内にお手植えされたという「五色の藤」。寺の裏山にはミニ四国八十八ヶ所がある。40分ほどで巡礼できる。本尊の薬師如来は、創建以来2度の火災を被りながらも難を逃れた。このため、厄除けに霊験があるとして、ひろく信仰されている。4月下旬になると見事な藤棚が見ごろになる。

薬師如来について 人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の誓願をあらわす如来で、

四国霊場にはいちばん多く祀られている。

筆者紀行

10番から歩いて10Kmを2時間45分（途中で2回で15分休憩）で着く、遍路道を歩く、田んぼのあぜ道、川の土手、車道、住宅地の狭い道路等を歩くが、やはり一番は遍路道です。足に負担が少ないし周囲の環境に恵まれている。最高で歩いていて疲れはなく気分が爽快になります。しばらく行くと細い橋が見えた。これがお遍路さんが渡るときに感動するとうわさの「潜水橋」のようだ。川の水量が増えると橋が潜るらしいが、今は水量が少ないので、どちらかというとも橋というよりも、細い道路のようだった。てくてくと橋を渡っていると、細い道だということに車が物凄い速さで通り過ぎて行く。人が歩いていてもスピードを落とす気配はないよう……。道幅が狭いので避けようがなく、大変に怖かったです。11番（藤井寺）には15時30分頃に到着し、お参りを済ませ。本日の歩き遍路の予定（14Km）の残りを歩き16時20分に終わりバスで岡山へ19時10分に着く。あと我が家へ



吉野川の潜水橋

第4回目＝平成20年7月7日(月)山越え「遍路ころがしの道」へ

歩き（ウォーキング）遍路 札所1ヵ所（12番札所） 13Km

12番札所＝(摩盧山) 焼山寺 所在地＝徳島県名西郡神山町下分地中 318

電話＝088-677-0112

宗派＝高野山真言宗
開祖＝役行者小角
本尊＝虚空蔵菩薩

○ 山門をくぐると、徳島県天然記念物に指定されている樹周5mを超える杉の巨木がある。奥の院は、境内から歩いて約1Kmの山頂にあり、その山中にも、樹齢約300年とみられる杉の巨木が群生している。標高700mに建つ深山の寺。修験者の聖地でもあった。

空海が訪れたとき、妖火を吐く大蛇が現れ行く手をはばんだ。そこで空海は法力で大蛇を岩戸に封じ込めたという。

◎虚空蔵菩薩について 大地と慈悲の地蔵菩薩とならんで信仰があつい。福と知を無限に持ち、空と智慧を象徴する菩薩として信仰される。

筆者紀行

当日の参加者は92名（スタッフ等を含む）バス2台で林原駐車を6時40分に出発し、途中に休憩を2回取り、前回歩き終わった11番（藤井寺）に10時05分に到着する。各自に準備を済ませ10時20分に先達さんを先頭に歩きだすが、大勢の人で大変です。標高938m、山の8合目にある12番札所（焼山寺）までの約13Kmの山道は、健脚でも5時間かかると言われている。上りあり谷にありの連続の道、遍路道で一番の難所だといわれている。高低差600メートル、約13キロのアップダウンの激しい山道です。歩き遍路に初めて訪れる最大の難所。ころげ落ちてしまうような道ということから「遍路ころがし」と呼ばれています。覚悟を決めていたが途中での、まるで岩肌を登っていくような場所もあって、まさに「修行の道」という感じ。上っては下り、下っては上る、とってもハードな道でした。当日は一山登り下り、二山登り下り、三山登ったことになる。11番（藤井寺）から約13Kmを6時間30分で着く、なお昼食（休憩等の1時間40分）は別途です。歩き終えて大変に疲れましたが、気分は非常に爽やかでした。ひたすらに歩いていると、ふと、誰かに見守れているような感覚がした。あとでほかのお遍路さんにこのことを話したら、その人も同じように感じたと言われました。弘法大師様に見守られていたのかも知れない……。まさに同行二人。

18時40分にバスに乗り、一路林原駐車場に22時30分到着、我が家には23時20分に帰宅。



焼山寺の巨木（天然記念物 一本杉）

歩き遍路の筆者（樋口俊介氏）現在も続いています。

次号は13番札所の大栗山大日寺からですお楽しみに。

『吉備国の語源・黄蕨について-3』

『吉備(黄蕨)国・高嶋宮伝承の解析』

日本先史古代研究会 会員 丸谷 憲二

1 はじめに

『日本書紀・古事記』による日本神話は^{たかまがはら}高天原・^{いずも}出雲・^{ひゅうが}日向神話に分かれている。吉備高嶋は日向の高千穂、大和の^{かしはら}橿原と並立すべき日本神話の聖地である。戦後の古代史学・^{そうきち}比較歴史学の津田左右吉は、応神天皇以前の話を全くのフィクションと考えた。井上光貞は文献史学と考古学と民俗学の三つの学問を組み合わせ、歴史を研究することを目的として国立歴史民俗博物館を構想した。

岡山県では^{かすまといわれひこ}神武天皇が、吉備国（黄蕨国）の^{たかしまのみや}高嶋宮に3年間（古事記:8年間）とどまり東征の軍備を整うとされている。吉備国（黄蕨国）^{たかしまのみや}高嶋宮の主要候補地は吉備国（黄蕨国）に4ヶ所ある。

『^{すやま}陶山系譜』と『^{せんだいきくじほんきたいせいきょう}先代旧事本紀大成経七十二卷本』により^{たかしまのみや}高嶋宮伝承を解析したい。

『^{すやま}陶山系譜』

てんでるくにてるひこほのあかりのみこと あまのかぐやまの
天照国照彦火 明 命 → 天 香 山 命 越後国蒲原郡 伊夜日子神社

うましまし の
宇摩志摩治尊 石見国安濃郡 物部神社

神武天皇東国発向之為從_ニ日向国_ニ 移_ニ 備中_ニノ国兵官軍_ニ 付_ニ 趣。則御武将宇摩志摩治尊之軍 虜_ニ ナ
リ依而。皇居之名_ニ 神 嶋 宮_ニト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄_ニル。皇居_ニ地名也。三年之神遊兵根御
船之數整内^{きはら}黄蕨（備中古名）之勇猛御方ニ馳集。宇摩志摩治尊 内裏為_ニメニ守護_ニ之ヨツテ^{つかさとる} 司_ニ 所ヲ
^{もののふ}物部ト名シ給フハ是ヨリ始ル。武士をモノノフト訓スル。利ヨリ非起ルニ即^{もののふ}物部別号ニ下ル由此城地今
ノ要砂築クニ洲濱ヲ城之外ト堀ニ用ユルニヨリ諸人呼_ニフ洲山城_ニト。天皇叡山聞而洲山ト給ヒ亦陶山ト
下シ給フ也。八杉 田邊 原 澤山 高辻 奥村 右之氏陶山家ヨリノ別家武功軍記ニ有テ世ニ知ルノ
所ナリ陶山ノ定紋洲濱ニ寄而洲濱ニ定メル。古城跡備中小田郡要砂村。古書ニハ西砂トアリ。
宇摩志摩治尊ヨリ七十五代 備中守高信 寿永三年（1184）屋島合戦ニ通盛教経トモニ勇々敷働後長洲
赤間關ニ而討死。

『^{せんだいきくじほんきたいせいきょう}先代旧事本紀大成経七十二卷本』 武田本

○「卷第十六 天孫本紀下」より

「^{おおとし}大歳（神）在_ニ乙卯_ニ三月甲寅朔己未、從_ニ入黄蕨国_ニ 今、起_ニ行館_ニ居御、是曰_ニ高嶋宮_ニ、積
_ニ三年_ニ淹、而楯_ニ舟楫_ニ蓄_ニ兵食_ニ也、将_ニ欲以_ニ一 舉而平_ニ天下_ニ也、大己貴尊（^{おおあなむちのみこと}大国主尊）児木旆彦命
神（^{きのまたのかみ}木俣神・^{くにがみ}大国主神の御子）、又黄蕨津彦命、為_ニ国首_ニ在_ニ国頭_ニ見_ニ（^{ひうがのくにこゆごほり}沖縄県のクニガミ。名護市以
北の山岳地帯と離島をさす。）天尊、作_ニ敬與二児国（^{ひうがのくにこゆごほり}日向国児湯郡）^{くんめい}君命_ニ、（『易经』「大君命あり国
を開き家を承く」天子を指す。）奉_ニ饗奉_ニ事、自造_ニ陳具_ニ、集_ニ兵調_ニ陳、進奉_ニ皇軍_ニ、于時行宮庭一
夜生_ニ八蕨_ニ、其長一条二尺、其太二尺五寸、其色濃黄、国有_ニ人神_ニ、云_ニ黄光命_ニ、即朝奏曰、此草異
草也、当治_ニ八州_ニ祥、是天為瑞、^{ぐんそつ}軍卒競_ニ之、故道_ニ此国_ニ号_ニ黄蕨国_ニ」

※ 写本であり書写ミスの可能性有り。斜体は調査中。

2 ^{きびのくに}吉備國の^{かりみや}行館伝承

2.1 『日本書紀』との比較分析

『日本書紀』では「日本書紀卷第三 神武天皇即位前紀 乙卯年春三月」とあり、吉備国に^{かりみや}行館（^{たかしまのみや}高嶋宮）
を設置したのは神武天皇とされている。

【日本書紀卷第三 神武天皇 即位前紀 乙卯年春三月 原文】

乙卯年春三月甲寅朔己未。徒入吉備國、起行館以居之。是曰高嶋宮。積三年間、脩舟楫、蓄兵食、將欲以一舉而平天下也。

【読み下し】

乙卯年の春三月甲寅朔己未。吉備國に徒りて入りましき。行館を起りて居す。是を高嶋宮と
曰ふ。三年積る間に、舟楫を脩へ、兵食を蓄へて、將に一擧げて天下を平けむと欲す。

3 おおとし 大歳神と「太歳干支」

『古事記中巻』は「吉備の高嶋宮に八年坐しき」のみで年号表記は無い。『日本書記』のいくつかの条には「是年太歳〇〇年」として、「太歳干支」が記載されている。「太歳干支」とは、十二年で太陽の周りを一巡する歳星（木星）の運行と逆方向に向かう化想の天体のことである。太歳紀念法（歳陰紀念法）と呼称されている。太歳甲寅を西暦年に換算して紀元前 666 年としている解説書がある。しかし、「史実としての年号は、太歳干支とは無関係な年代にある」と倉西裕子は報告している。

『先代旧事本紀大成経七十二卷本』「卷第十六 天孫本紀下」の吉備國行館記録は「大歳在」で始まる。大歳神とは、『古事記・神代記』の説明では「速須佐之男命が大山津見神の娘、神大市比売に娶って生まれられた御子である。宇迦之御魂神は兄弟神」である。大歳神は五柱の御子神をもうけられた。

『先代旧事本紀大成経七十二卷本』の「先代旧事本紀卷第十七 神皇本紀上卷上 神武天皇」にも、「大歳在」の記録が 3 ヶ所ある。

大歳在_{おおとし}於甲寅_{おととし}、冬十月丁巳朔辛酉、天皇親師_{おととし}諸兄諸皇子等_{おととし}、・・・

大歳在_{おおとし}己未_{おととし}、二月辛卯朔丙辰、導臣命率_{おととし}地来目部_{おととし}、・・・

大歳在_{おおとし}於庚申_{おととし}、秋八月癸丑朔戊辰、天尊将立_{おととし}正妃_{おととし}、・・・

3.1 おおとし 大歳（大年）神社

姫路市東部に大歳（大年）神社が 30 社、中部に 10 社が集中している。兵庫県には神戸を中心に大歳神を祀る大歳（大年）神社が 380 社ある。大歳（大年）神社とは大歳神を祀った神社である。

『延喜式神名帳』には山城国乙訓郡、大和国高市郡（二座）、和泉国大島郡、遠江国長上郡、但馬国二方郡、岩見国那賀郡（島根県江津市都野津町の式内社大歳神社）に計七座の大歳神社が記録されている。

現在も大歳（^{おおとし}大年）神社は、中部以西に広く分布しているが東日本には比較的少ない。

岡山県の^{おおとし}大歳神社は、真庭郡新庄村と笠岡市馬飼・絵師・金浦・飛島にあり、^{おおとし}大歳天神社が浅口市鴨方町本庄にある。^{おおとし}大歳天神社は、最初は兄弟神である宇迦大神の山上に鎮座し二度目に遷座した社地に^{おおとし}大歳という字が残っている。

4 年号 「^{きのとうきのえ・とら}乙卯 甲 寅」の解析

『魏志倭人伝』によれば、「日本には 3 世紀当時においてさえ暦法が無く、いわゆる自然暦を用いていたことが推察される」と大谷光男は報告している。『日本書紀』欽明天皇 14 年（553）六月の条が暦博士・易博士の初見である。隅田八幡宮の人物画像鏡（仿製鏡）の銘文には西暦 383 年説と 443 年説がある。明確なのは^{たいさいきのえ・とら}太歳 甲 寅を西暦年に換算した紀元前 666 年説は間違いである。

^{きのとうきのえ・とら}乙卯 甲 寅は年号の記録である。^{きのとう}乙卯は 60 通りの組合せができる干支の一つ。干支の組み合わせの 52 番目で前は甲寅、次は乙卯の年となる。西暦年を 60 で割って 55 が余る年が乙卯の年である。陰陽五行では十干の乙は陰の木、十二支の卯は陰の木で比和である。（比和:同じ気が重なると、その気は盛んになる。その結果が良い場合には益々良く悪い場合には益々悪くなる。）

内田正雄は「日本書紀の暦日は 5 世紀の半ば頃までは儀鳳暦（平朔）により、以後は元嘉暦によるものであることを始めて明らかにしたのは小川清彦氏である。」と報告している。

『^{せんだいきくじほんきたいせいきょう}先代旧事本紀大成経七十二巻本』が記録された 622 年迄の「^{きのとうきのえ・とら}乙卯 甲 寅」は『日本書紀暦日原典』では下記となる。神武天皇即位前記の紀元前 665 年は神話上の年号である。^{てんのう}天皇とは 7 世紀以後の日本の君主の公式称号である。天皇号使用以前は^{おおきみ}大君号である。この記録が史実であれば考古学上の知見より吉備国滞在の年度を推定できる。

神武天皇即位前記	紀元前 665 年 03 月	〔神話上の年号〕（暦法は伝来していない。）
充恭 40 年	西暦 451 年 04 月	儀鳳では ^{きのえ・とら} 甲 寅とある。
継体 02 年	西暦 508 年 02 月	儀鳳では ^{きのえ・とら} 甲 寅とある。
欽明 25 年	西暦 564 年 12 月	儀鳳では ^{きのえ・とら} 甲 寅とある。

『日本書紀暦日原典』「日本書紀・儀鳳（平朔）・元嘉 異同表」より抜粋

「西暦 445 年以後の元嘉・儀鳳（平朔）の比較」より抜粋

4.1 日付 「^{つちのと}己」・六日

源（水戸）光圀修の『大日本史』は^{きのとう}「乙卯の歳、三月六日己未」と表記している。五日とした文献もある。^{つちのと}「己」（き）は、十干の 6 番目である。陰陽五行説では土性の陰に割り当てられている。^{つちのと}「己」の字は三本の平行線を形取ったもので、そこから、条理が整然としている状態という意味となる。十干では、植物が充分生長し形が整然としている状態として、^{つちのと}「己」は 6 番目に宛てられた。十干を順位

づけに使った場合には、「^{つちのと}己」は6番目の意味となるが、「^{つちのと}己」まで使われることはほとんどない。

4.2 時刻 「^{ひつじ}未」・未の刻は午後2時を中心とする約2時間

「^{ひつじ}未」(み)は十二支のひとつ。通常十二支の中で第8番目に数えられる。前は午、次は申である。

^{ひつじ}未年は、西暦年を12で割って11が余る年が未の年となる。^{ひつじ}未の月は旧暦6月。^み未の刻は午後2時を中心とする約2時間。未の方は南南西よりやや北寄り(南西微南)の方角である。五行は土気 陰陽は陰である。「未」は『漢書』律曆志によると「^{まい}昧」(暗いの意)で、植物が鬱蒼と茂って暗く覆うこととされ、『説文解字』によると「^み味」(あじの意)で、果実が熟して滋味が生じた状態を表しているとされる。後に、覚え易くするために動物の「^{ひつじ}未」が割り当てられた。

4.3 朔と平朔

平朔とは地球から見て太陽と月が同方向にある時、太陽と月の黄経が一致する時を朔と言う。太陽が天球上を通る道が黄道で、黄経とは黄道上で測る経度である。朔の時は地球から月は見えない。この朔の時刻を含む日が朔日で暦月の第1日となる。朔から次の朔までを1朔望月といい、朔日から次の朔日の前日である晦日(つごもり)までが1暦月である。朔日【ついたち】と呼称する。

黄光命は方位神である^{たいさい}太歳神の別称と考える。

5 ^{きびのくに}吉備國の^{かりみや}行館伝承の考察

『古事記・日本書紀』では^{きびのくに}吉備國行館伝承は神武天皇伝承としている。『^{せんだいきくじほんきたいせいきょう}先代旧事本紀大成経七十二卷本』では^{おおとし}大歳在とある。どちらの記録が史実を記録しているかを検証しなければならない。

笠岡市の馬飼(大字は^{おおとし}大歳)・絵師・金浦・飛島に^{おおとし}大歳神社があり、近くの浅口市鴨方町本庄に^{おおとし}大歳天神社がある。浅口市鴨方町本庄鎮座の^{おおとし}大歳天神社の最初の鎮座地が兄弟神である宇迦大神の山上である。

山上より眺め最適の地を探したの意である。他の高嶋伝承地の近くには^{おおとし}大歳神社は無い。つまり、「^{おおとし}大歳在」とは、「^{おおとし}大歳」が先回りしてお待ちしていたと解すべきであり、^{おおとし}大歳神は方位神である^{たいさい}太歳神と考察すべきである。

^{きびのくに}吉備國の^{かりみや}行館は笠岡市神島・高嶋となる。『神明帳』には^{おおとしのかみのやしろ}大歳神社は六社登録されている。石見国安濃郡・岩見国那賀郡(島根県大田市川合町川合)より神島に^{かりみや}行館を設置され3年間駐在し活動された。笠岡市に陶山という地名がある。陶山地区の西隣は広島県福山市である。『^{すやま}陶山系譜』は、「皇居之名^{こうのしまの}神嶋

宮ト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄_ル。皇居_ニ地名也。」と笠岡市の神島としている。重要なのは皇居の名前を高嶋宮ではなくて神^{こうのしまの}嶋宮としていることである。

私は笠岡市飛島の大歳神社に注目した。大飛島の小字が「洲ノ本」であり、小飛島の小字が「洲ノ濱」であり『陶山系譜』の洲濱である。大飛島の洲の付根近くに多数の土器が発見され、それが遣唐船（8～9世紀頃）の海路祈願祭祀用のものであることが明らかとなり国指定重要文化財（大飛島祭祀遺跡出土品 308 点）となっている。「海の正倉院」と呼ばれるほど多彩な出土品である。

6 吉備国高嶋宮^{たかしまのみや}伝承の従来説

吉備国高嶋宮^{たかしまのみや}伝承の従来説として4説有る。「沼隈郡説・神島説・宮浦説・高島山説」である。

高嶋宮^{たかしまのみや}は、日本書紀によれば神武天皇が3年間（古事記:8年間）駐在された場所である。神武天皇は、太歳甲寅の年10月5日に高千穂を出発し軍舟を率いて東征の途にのぼられた。豊後海峡を通り宇佐・筑紫・安芸に寄られ翌年3月6日に吉備国高島^{かりみや}に行館^{たかしまのみや}（高嶋宮）を造り駐在された。吉備国にて天下を平定するために舟を準備し武器を調達し食糧を蓄えた。戊午^{つちのえうま}の2月11日東に向かい出航した。後に大和にて即位された。比較検証のために従来説を紹介したい。

6.1 広島県沼隈郡説

郷土史家・濱本鶴賓^{はまもとかくひん}（濱本清一^{はまもとせいいち}）が、明治45年（1912年）に処女作『吉備高島考』を出版し、神武天皇聖蹟吉備高原宮址を黄光命の出身地として備後東岸なりと考証した。兼田高州（明逸）は田島はタカ島の訛りしものであるとして沼隈郡の南部沿岸にある田島村の王太子宮と主張した。

6.2 笠岡市神島説

世良長造は「神武天皇時代の高嶋は、今の神島と高嶋を併称せるものと思わねばならぬ」と主張した。神島神社は延喜式での名神大社との伝承があり、近くに高嶋があり王泊（船の停泊地）という地名も有る。高嶋は、面積1.05km²、周囲5.9km、標高84m、人口127人（平成20年3月31日現在）の島である。笠岡港より南約8km（陸地からは3km）の瀬戸内海国立公園にあり、白石島の北、神島の南に位置している。高嶋は昭和19年に名勝に指定された。三洋汽船で笠岡港から35分、神島外港から10分。太古から人の住んでいる島で縄文時代や古墳時代の遺跡が確認されている。内海航路の重要な寄港地の一つで古歌にも多くうたわれている。陰陽石と石舞台が知られている。

神^{かみ}卜^{うら}山^{やま}は神武天皇が高島滞在の折、吉凶を占った山と伝えられ、山頂には「高島行宮遺趾」と題した自然石の巨碑がある。展望台からは笠岡諸島をはじめ、瀬戸内海の大パノラマが広がる。また、神^{かみ}卜^{うら}山^{やま}へ向かう遊歩道沿いには、神武天皇が天神にお供えする水を汲んだと伝えられる「真^ま名^な井^い」が残っている。高嶋神社は神武天皇が滞在した吉備国高嶋行宮跡と伝えられる神社である



「神島の高島行宮遺趾」



「神武天皇宮」「神武天皇社」

昭和 31 年の岡山県高島遺跡調査委員会『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』で梅原末治（京都大学文学部）は、「今回の高嶋に於ける王泊、黒土両遺跡の調査は当初地元の人々が寄せた所謂神武天皇東征と結びつくものとした期待からすると、それとは全くかけはなれた結果に終わった。」と笠岡市高島説を完全に否定している。

6.3 岡山市児島湾・宮浦説

岡山市の児島湾、児島水道に浮かぶ高嶋がある。今は無人島である。島の南端に高嶋神社が鎮座している。ここが高嶋宮址である。高島及び南岸宮浦には神武帝駐師の故跡という伝承がある。高嶋神社は宮浦を向いて建っている。1967 年（昭和 42）9 月 1 日から 10 日間、瀬戸内考古学研究所の正式な発掘調査が実施されている。鎌木義昌（岡山理科大学教授）は「岩盤山頂上に巨石を中心とした祭祀遺構があり周辺部から 5 世紀末から 6 世紀初頭の^{まがたま}勾玉等の石製模像品や^{はじき}土師器、^{すえき}須恵器が発見されている。祭祀期間は比較的短期間である」と報告している。他にも、日本製の小型重圈文鏡や鉄剣、甲冑の断片等が発見されている。



備前児島・高嶋の高嶋神社

皇紀 2600 年記念事業の一環である昭和 17 年文部省発行の調査報告書『神武天皇聖蹟調査報告』では児島郡甲浦村字高島（岡山市児島湾の高島）を聖蹟伝説地としている。聖蹟伝説地とは「地点または地域について江戸時代を降らない時代に記録せられた口碑伝説をもち、価値ありと認められるもの」である。その記録とは、寛永年間（1624～1644）の『備前国絵図』と天和元年（1681）山田定経撰の『遊高嶋記』に神武東征のとき舟をめぐらせ兵食をたくわえた地として名が記録されていることである。戦前の皇国史観では論争に終止符が打たれた形になっている。

6.4 岡山市賞田の高島山説



岡山市賞田の吉備高嶋宮

岡山市賞田は龍の口山の南麓である。両備バス旭川荘行「脇田入口」下車徒歩 5 分。

高島山説として『高嶋村史』の水藤千代造説が知られている。

- ① 往古より高嶋と称し、神明帳所載の高島神社現存すること。
- ② 水陸の要衝に当れること。
- ③ 出雲との交渉に絶好の地形なること。
- ④ 三軍を容るべき地帯を有し、糧食、飲料水を得るに兵備を整ふるに適好地たること。
- ⑤ 吉備の中心地にして、吉備上道臣三野臣の土着蕃街の地なること。
- ⑥ 付近広大なる古墳の存すること。
- ⑦ 吉備の中心地たるを以て、中古、吉備大宰、備前国府の所在地たりしこと。

7 まとめ

- ① 『日本書紀』とは『^{せんだいきくじほんきたいせいきょう}先代旧事本紀大成経七十二卷本』の要点のみを表記した記録である。
- ② 『古事記・日本書紀』では^{きびのくに}吉備國に^{かりみや}行館（^{たかしまのみや}高嶋宮）を設置したのは神武天皇としている。『^{すやま}陶山系譜』に「^{こうのしまの}皇居之名神嶋宮ト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄ル。皇居地名也。」とある。
『^{せんだいきくじほんきたいせいきょう}先代旧事本紀大成経七十二卷本』には^{おおとし}大歳在とある。笠岡市の馬飼・絵師・金浦・飛島に^{おおとし}大歳神社があり、近くの浅口市鴨方町本庄に^{おおとし}大歳天神社がある。浅口市鴨方町本庄鎮座の^{おおとし}大歳天神社の最初の鎮座地が兄弟神である宇迦大神の山上である。山上より眺め最適の地を探したの意である。
他の高嶋伝承地の近くには^{おおとし}大歳神社は無い。つまり、「^{おおとし}大歳在」とは「^{おおとし}大歳」が先回りしてお待ちしていたと解すべきであり、^{おおとし}大歳神は方位神である^{たいさい}太歳神と考察すべきである。

つまり、吉備國の行館（高嶋宮）は笠岡市の神島宮となる。

- ③ 源（水戸）光圀修『大日本史』の校注には「高嶋宮 今の備中国小田郡高嶋の王泊の地、其の旧址なりと云う」とある。『大日本史』は水戸光圀死後の正徳5年（1715）の藩主綱條による命名である。「本朝史記」・「国史（倭史）」とも呼ばれている。
今回の調査結果は水戸光圀説と世良長造説の補説である。

- ④ 新納泉（岡山大学教授）は、吉備の古墳時代を10期に分け前方後円墳を分析している。「I期（3世紀後半）には南部と北部では規模の差に無い。それが次第に南部の古墳が大型化して中心が現れる。5期（5世紀前半）の造山古墳は一人勝ち。それが7期（5世紀後半）には中心が備前と備中に分かれ、次の8期（5世紀後半～6世紀初頭）には1期に戻ったようになる。これは雄略朝期のいわゆる吉備の反乱の時期で、やはり何か大きな事が起きたと考えざるをえない。この5期と8期が吉備の歴史の大きな画期といえる。」と報告している。

- ⑤ 吉備國の行館（高嶋宮）伝承は、神武天皇即位前記 紀元前665年〔神話上の年号〕では無く、西暦451年、508年、564年の史実となる。新納泉説より考察し508年（継体2）の史実伝承と推定する。新納泉説の補説である。

参考文献

- ①『天皇家のふるさと日向をゆく』梅原猛 2000 新潮社 ②『国史大事典9』昭和63年 吉川弘文館
③『日本史史料総覧』村上直・高橋正彦監修 昭和61年 東京書籍 ④『姫路の神社』兵庫県神社庁姫路支部編著 2005 神戸新聞総合出版センター ⑤『東備郡村志 吉備群書集成(二)』昭和45年 歴史図書社 ⑥『岡山県通史』永山卯三郎 昭和5年 岡山県通史刊行会 ⑦『絵師鎮守 大歳神社270年記念大祭』パンフレット平成24年 ⑧『女王国邪馬台国の謎に迫る』若狭哲六 1991 古代先史古代研究会 ⑨『古代の暦日』大谷光男 昭和51年 雄山閣出版 ⑩『釈註大日本史一』源（水戸）光圀 修 昭和39年 大日本普及会 ⑪『天皇の並外れた長寿と在位期間 日本書紀の真実 紀年論を解く』倉西裕子 2003 講談社 ⑫『日本書紀暦日原典』内田正雄 昭和53年 雄山閣 ⑬『日本古代神祇事典』吉田和典 平成12年 中日出版社 ⑭『真庭郡誌 全』大正12年 真庭郡役所 ⑮『鴨方町史 本編』平成2年 鴨方町 ⑯『岡山県大百科事典下巻』昭和55年 山陽新聞社 ⑰『吉備高島考』濱本鶴賓（濱本清一）1912年（明治45）【沼隈説】 ⑱『吉備高島宮研究史料』兼田高州 吉備高島史跡顕彰会 1938（昭和13）【沼隈説】 ⑲『吉備高島宮趾概説』吉備高島宮趾顕彰会編 吉備高島宮趾顕彰会 1935（昭和10）【笠岡説】 ⑳『吉備高島宮趾』世良長造 高島宮趾顕彰会 1936（昭和11）【笠岡説】 21『吉備高島備中神武天皇記』立神勝彦 1937（昭和12）【笠岡説】 22『吉備高島宮趾と瀬戸内海国立公園』世良長造 吉備高島宮趾顕彰会 1938（昭和13）【笠岡説】 23『吉備高島考証』世良長造 吉備高島宮趾顕彰会 1939（昭和14）【笠岡説】 24『吉備高島考證』世良長造 吉備高島宮趾顕彰会 1939（昭和14）【笠岡説】 25『続吉備高島考証』世良長造 吉備高島宮趾顕彰会 1940（昭和15）【笠岡説】 26『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』昭和31年 岡山県高島遺跡調査委員会【笠岡説】の否定 27『笠岡市史 第一巻』昭和58年 笠岡市【笠岡説】 28『皇国地誌（明治9年編）笠岡市史 史料編上巻』平成11年 笠岡市【笠岡説】 29『笠岡市史 地名編』平成16年 笠岡市【笠岡説】 30『参修高島考』水原岩太郎 昭和15年【児島説】 31『吉備高島』出版年不明 邦美堂印刷【児島説】 32『郷土に伝はる吉備高島宮趾』ほか 新聞切抜 渡辺知水編 出版年不明【児島説】 33『備前高島遺跡について』鎌木義昌『サヌカイト創刊号』1968年 岡山理科大学考古学部編【児島説】 34『吉備高島宮考』光岡石太郎 吉備高島宮聖跡顕彰会 1937（昭和12）【高嶋山説】 35『吉備高島行宮考』鈴木定一 1937（昭和12）【高嶋山説】 36『高島村史』水藤千代造 1937（昭和12）【高嶋山説】 37『神武天皇東遷経路 吉備国 高島宮』<http://www.geocities.jp/mb1527/N3-15-1tousen6.html> 38『第229回 神武天皇の東征経路 その2』<http://yamatai.cside.com/katudou/kiroku229.htm> 39『高島神社』<http://kouminkan.city.okayama.okayama.jp/takashima/shiseki/ssk04.html> 40『吉備 高島の宮 磐座』<http://www10.ocn.ne.jp/~veeten/iwakura/okayama/takashima.html> 41『岡山市史 古代編』昭和37年 岡山市役所 42『岡山県史 原始古代 I 第二巻』平成3年 岡山県 43『岡山県史 第

17 卷 年表』平成 3 年 岡山県 44『神宮史年表』神宮司序編 平成 17 年 戒光祥出版 45『新古代日本史』山内邦比古
平成 3 年 46『おかやま歴史塾 26 第 5 期 時代と人々④巨大古墳の主たち』新納泉 2008 年 10 月 13 日山陽新聞 47『岡
山県史 第 19 卷 編年史料』昭和 63 年 岡山県 48『日本文学体系 1 古事記祝詞』倉野憲司他校注 昭和 33 年 岩波書
店 49『新潮日本古典集成 古事記』西宮一民校注 昭和 54 年 新潮社 50『日本古典文学大系 67 日本書紀上』井上光
貞他校注 昭和 42 年 岩波書店 51『先代旧事本紀大成経(一)・続神道体系 論説編』平成 11 年小笠原春夫校注 神道
体系編纂会

編 集 後 記

○ 定期総会の報告

去る平成 23 年 4 月 19 日（火）に熊山山頂の集会場に於いて、平成 23 年度の定期総会と講演会を開催いたしました。今回の総会で規約も制定し役員も選出いたしました。

会長＝若狭哲六 副会長＝延原勝志・丸谷憲二 会計＝井上秀男 監事＝片山伸栄

事務局長＝山崎泰二 事務局委員＝上記6名の他樋口俊介・本松一郎の 8 名

事務局委員は“きび”考編集委員を兼務 顧問については会長任命とする。

その後丸谷憲二氏が「大内神社（香登）の古代文字」の演題で、また山崎泰二が「考古フアンのじゃれごと 吉備から古代隣国（東アジア）を考える」と題して講演を行いました。昼食後は熊山遺跡研究家の岡野進氏による熊山界限の案内を予定していましたが、足元が悪く会場でお話を伺いました。岡野氏は熊山遺跡調査研究会の副会長でもあり今回の集会場の世話もなさっていて大変お世話になりました。ありがとうございました。

○ 若狭会長の出版記念祝賀会が本号で紹介しましたとおり、5 月 22 日に開催されました。当日の

企画主催して頂いたのは、この会の顧問でもある岡山県華僑華人総会の劉会長で、また当会の名誉会長でもある大守隆氏が発起人代表として、公務多忙のなか駆けつけて頂きました。特に企画していただきました劉会長にはこの場をお借りして御礼申し上げます。出版された本をまだお読みでない方は直接先生に申し込んでください。

- 秋には史跡探訪として笠岡市高島を予定しています。この島は若狭先生の思い出の地でもあり、今回丸谷氏が紹介した「神武天皇東征伝説」の土地でもあります。7月中には下見調査を行い、企画しご案内をいたします。お楽しみにお待ちしております。ご参加のほどをお願いいたします。
- 今回は矢吹壽年氏の登場です。縄文土器の学術論文は多く見かけますが、縄文土器の出現で食文化が向上し、縄文人の人口増加に繋がったとの視点は、流石だなと感心いたしました。余暇を利用して朝鮮半島の史跡を何度も探索なさり、中国・朝鮮半島の歴史にも造詣が深い方でもあります。大山火山噴火により蒜山湖が決壊し岡山平野を造ったとの熱い想いを語っておられます。これからの寄稿が楽しみです。
- 大守隆氏の「王藤内と曾我物語」は如何でしたか。ご先祖謂れの紀行文的な文筆に、日頃世界を相手に活躍の大守さんを重ねると別の一面を見ることが出来ました。次稿を期待しています。
- 掲載させて頂きました論文やエッセイについて会員・読者の皆様の感想なりご意見をお寄せください。以前掲載した分に対するご意見もかまいません。随時受け付けていますし必要に応じて、紙面に掲載させていただきます。古代史に関しては色々な角度での志向があり解釈によっては別の展開に発展します。それがまた面白いところかも知れません。筆者にしても反論や意見を頂戴して学ぶところも多いかと存じます。
- 今回から仮称“きび考”の仮称をとり“きび考”といたしました。本年4月の総会での申し合わせによるものです。年3回の発行を予定しています。次回は秋の史跡探訪の特集を考えています。「磐座」や「神武東征の高島」にまつわる投稿・寄稿を特にお願いします。シリーズものは当然引き続き掲載します。
- 先史古代に関わり無く読者や会員の日頃の活動・関心ごとをお寄せ下さい。エッセイや近況報告でもかまいません。必要に応じて取材に伺います。
- この会は会員の会費で運営されています。年会費 2000-です。未納の方は事務局か会計担当の井上秀男(〒710-0143 倉敷市木見 191-2 自宅電話 FAX 共 086-485-2243)まで納付下さい。
- なおこの冊子をお届けしたい所が御座いましたら事務局までご紹介下さい。事務局でお届けします。紹介したい入会希望者も同様です。

編者 山崎泰二

“きび”考 第4号 2011(平成23)年7月15日発行

発 行 日本先史古代研究会
会長 若狭哲六 岡山県備前市東片上 771
事務局 岡山県岡山市中区桑野 504-1 山崎泰二方
電話=086-276-6654 FAX=086-276-2241
メール=top@bosaisystem.co.jp
編集委員 井上秀男 延原勝志 樋口俊介 本松一郎 山崎泰二